明治三十三年五月三日發行

女藝

第貳百四號

東京園藝社

女鑑第貳百四號

目録

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

永村三右衛門が妻



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

平凡なる家庭を作れ

根に培はずして、枝葉の繁茂を冀はんとせむ、誰が、その愚なるを嗤はざらんや。而るも世の事は、往々にして、その本に至りて論ずれむ、明々白々なるべきを、徒らに、その末に拘泥して、互に排撃し、互に罵詈するもの多し。彼の國家の事を論し、社會の事を語る人々か、國家社會の元素ともいふべき、家庭の事を等閑に看過したるは、蓋しその一に數ふべきものならん。今の世に立ちて、事に社會的業務に從ふものも、未來に於て、第二の社會を組織すべきものも、何も皆、家庭のために、影響せらるゝ所、決して尠しとなさず。然るを世の論者か、全く家庭を顧みずして、萬事の説を立てたるは、その謬れるの甚だしき點にして、その企つる所が、概ね良き結果に終らざる、蓋し、之に原けるなるべし。然るに近日に至りて、凡百の社會改良は、その源全く教育の普及と振作とに在り。而して、教

育の普及と振作とは、先づ家庭の善惡如何に由りて定めらるべしと知られたるより、世間の注意は先つ、わが家庭の改良といふに集まり、改良せらるへき家庭の模範として、今の上流、または中流以上の家庭の實状を寫し、或は之にあたるべき理想を畫きて、著作に、雜誌に、新聞に載する所多し。是實に社會の慶事たり。その慶事たる、則ち之を失はずといへども、わが觀る所を以てすれば、猶且つ、缺點のありて存するを覺ゆ。

この缺點として、既に世に數へられたるものには、模範として擧げられたる家庭が、所謂社會の中流以上に限られたるを言ふものあり。われも亦、その然るを認めむとす。然れども、一二論者の言ふが如く、かの模範家庭が執れる生活の、社會中流以下にあるものには、學び難く、到り難しとの理由を以て、之を排せんとはせず。かくの如きは固よりその缺點たるべし。然れども、他の缺點の、更に大に、これに踰えたるものあるを觀るときは、これ寧ろ、第二に論せらるへきにあらざるやを感ず。

簡單にいへば、わが認めて以て、今の家庭改良論者の誤見にあらずやとなす所は、

改良家庭に於て作らるべき、人物の程度如何の點にあり。世人が孜々とし、汲々として、今の家庭の改良せられざるべからざるを言ふに當りて、如何なる人物を產出せしめむがために、この家庭の改良を企てたりやと問はゞ、その答は果して如何なるべき、今の摸範を示すに勉むる人々も、論辨に力を尽す人々も、皆共に、智德完備、殆んど無缺の人を作らんと希望しつゝあるにはあらざるか。如此の希望は、決して惡しきにはあらずと雖ども、われは寧ろ、その實現し難き理想にあらざるやを疑はんとす。國家社會が、個人に對し、家庭に對して、期待する所は、果してかくの如く大にして、かくの如く高きか。この大にして、且つ高き希望に向ひて、わが未來の家庭を形成せんと欲するものあらむ、その失望に終り、落膽に終らざるもの、夫れ幾干ぞ。

國家は、一人の偉人を以て、能く、その昌榮と發達とを、完うすべきものにはあらず。古往今來、英雄と呼び、豪傑と稱せらるゝものが、その偉績を垂れ、奇功を奏したるは、實に他の所謂群小が援助に待つもの多かりき。表にあらはれたる一個の英俊が、公然たる行動には、裏にかくれたる數千の無名の豪傑が、隱然た

る扶翼のあるあり。ある時は、之に藉りて、赫々たる勳を全うし、またある時は之を缺きて、慘憺たる末路を賦せらる。國家社會が常に、一人の傑人を待つは、理當に然るべしと雖ども、國家社會を擧りて、この一個の人を作らんが爲めに、焦心し、苦慮したるの後、その多くのものが、贏ち得る所は果して如何。若し虎を畫きて、猫にだも類せむ猶慰むるに所あり、或は狗に肖せんか、世間の嗤笑は固より、之を意となすこととなしとするも、その失望と落胆とは、果して何を以て、醫するを得べきか。

われは語を寄せて、新たに家庭を組織すべきの人、または家庭の改良に心あるの人に告げんとす。諸君の家庭に於ては、なるべく智徳平等なる人物を生ずるに勉められんことを、諸君知らずや。今の世はあまりに、英傑と俊邁とに滿ちたり。希くは諸君の家庭に於て、平凡なる人物を作るにつとめられんことを。これわが平凡なる家庭と呼ぶ所のものにして、今の世に於ても、未來に於ても、尤も要用なるべきは、蓋し、この平凡なる家庭ならむ。諸君も屢々之を顧られたらんが如く、國家の中心となり、社會の樞軸となり、以て人類活劇の場裡に、勇戰奮鬪の選ち

するものは、今の世に於て、全く之を中等社會に求むるの外なし。而も現下の中等社會が、如何に墮落し、如何に腐敗せるかを思ふときは、幸にして彼等の後を襲くべきものに、强健なる意志と、確固たる學識とを植ゑて、たゞにその智は以て、新時代の要求に應ずべきものたらしむるのみならず、その德も亦、淨く高からんとを勤めしむべきにあらずや。諸君にして、若し心をこゝに存し、新らしき家庭に於て、かくの如きの人物を養成し來らんか、世人が渴望して止まざるの、傑人も英俊も、これをその中に擇み、その中に養ふと、敢て難しとなすを要せし、われは更に言ふ。今に於て改良せられたる家庭は、宜しく平凡なる家庭なるべしと。諸媛この意を諒せんや否や。





日本女子今後の覺悟（十九）

三輪田眞佐子

思ふに、植物は、培養の效を積まざれど、美花を着け能はざるがごとく、人も社交的の感情を修養せざれば、孤立を愛して、他人を厭ひ、以て圓滿なる生活をなすこと能はざるべし。たとへ、しかあらずとも、社交的の愉快を味ふことあたはざるべし。

見よ、猜忌の念ありて、他人の立身出世を惡み、亦知人の美事義擧を譏る例もあり、其は相當なる教育を受けし婦女に反りて多きがごとし。蓋しその理由は、獨を愼む道理を知り、父兄に對する義務のみは知らんも、いまだ社交的德育を受けざるため、嫉妬の心あるを免れざればなり。古より、婦人は、內事を守る定なれば、おのづから、外に出で、廣く衆と、交ることを知らざるより、社交的觀念の發達すること遲し。由りて日本女子、今後の覺悟に於て、必要なるものは、亦、社交的の同情同感の養成にあるがごとし。

杜甫、かつて歌ひけらく君不見管鮑貧時交此道今人棄如土、と、實に、人は信義のため、交を結ぶもの少くして、利益のため、媚を呈するもの多し。さればにや、時めく人の門前は、車轍を重ね、亦、その手をとりて、君と余は、水魚の友なり。或は、金蘭の契なりと言ふもの數ふるに暇なきばかりならんも、一朝要路を去り、家產を傾けあるは、不歸の客となるごとき時に臨まんか。あ

はれ、その妻子を訪ふものさへなくして、忽ちむぐら生の宿と變ずるは、なべて世の慣習ならずや。

されど、物のあはれを知り、目に涙あるものは、一度、人を友と定めんか。生涯、その心を變ぜざるべし。實に往時、我れを知遇せし友の黄泉に入る如き場合に於ては、その未亡人を救ひ、その孤兒を敎へ導く覺悟の人こそ、眞に友と恃むに足るべけれ。されど、今日の世に、果して、彼の管仲と鮑叔とが、得意の時も失意の秋も、始終相異らざるごとき、交情の暖かなるものありや。おのれ多年世波に浴し、辛酸を嘗め盡しゝかば、經驗上より、概ね、盛時の友は、眞の友にあらざるもの多く、故に、一旦位置を變ぜんか、行路の人と同じきもの少なからざるを知りぬ。由りて、十年一日のごとき良友に對せば、感謝の涙、袖を潤すを知らざるなり。

亦、世人の訣別などにつきて見るに、比較上、人を迎ふもの多くして、送るもの少し。されど熟々考ふるに、未だ見ず、知らざる人を迎ふるには、以て知遇を求むるための禮と言ひ得んも、將來の私利を慮りて、然はするものもあるべし。これに反して、人を送るこそ、これまで懇親を結びしも、相別るべければ、連綿の餘情盡きずして、然かあるべけれ。されど、これに顚倒の現象あるは、以て、人情の輕薄なるを推度するに足らんかし。なほ人の葬儀につきて見るに、勢ひ盛なる家主の死せし時よりも、比較上、その家族の死するを聞く時は、弔ふもの多き例なるは、全く、死者に恩怨ありて、然るにあらず、唯當主に對する感情如何を目的として然るめり、これおのづから、人情の冷かなる證ありといふべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

凡て、共に一河の流を汲み、共に一樹の陰に息うも、必ず、友情の起るものを、況して多年恩義を蒙りて、知己となりける以上は、輕々しく友情を棄つべきにあらず。近來離婚の流行するを以て、非とするがごとく、絶交の容易なるも、國民道德の敗退する所以なれば、可といふべからず。されば、知人は折を以て交情を温め、機を得て消息するこそ、望ましけれ。おもふに、世の文化に伴ひて、各人相互に忙はしければは、虚禮のため、多き光陰を浪費し、亦奢侈に流るゝは、好すべきにあらざれども、寒暑の見廻も、無益なり。無用の消息は、廢すべし。と、目前の實利のみをいふものに、雷同せんか。遂に國民相互の間に親和なく、唯利を事とする群集より、國家を組織するに至るべし。思ふに國家の强弱は國民相互に信義を以て、團結するにあらずば、決して、强固ならじ。これを以て、その國民相互の交情は、施きて、國家の盛衰に關すべし。由りて、おのれは、交際につきて、讀者の注意を促すことかくなん。

家庭と學問

蓼花

敎育上に於いて、家庭の勢力の大なるは、今更に喋々するを要せじ。家庭の惡しきがために、學校に於ける生徒の修學上に蒙むる所の損害は、實に數へ盡くし難し。家庭が敎育ある人を以て、組織せられたればとて、必らずしも良き家庭とは、名づくへからず、もとより父と母とに學あり、識あり、德あり。行正しきものあらば、その家庭には、善良なる敎育と訓誨との行はるゝものあるべしと雖ども、假令、爾かく完全なる父母ならずと

も、善くその子を導く所以に於いて、誤る所なくば、之を名づけて、良き家庭といふも敢て妨げとはならず。良き家庭が、その子弟を化導する道は、多々なるべし。然れども、學問に身を委ねんとする子弟を、扶翼育成せしめむがためには、家庭は、果して、如何なる方法を取りて、その處置を施すべきか。これわが今、少しく語らんと欲する所にして、また、わが疑ふが如くば、世間多數の家庭は、その方法をあやまれるもの、蓋し、この點に於いて、尤も甚しとすべきにあらざるか。

學問に身を委ねんと欲する子弟を導きて、よき家庭と稱せらるゝを得んがためには、家庭は、先づ、其の報酬を求むる心を去らざるべからず。

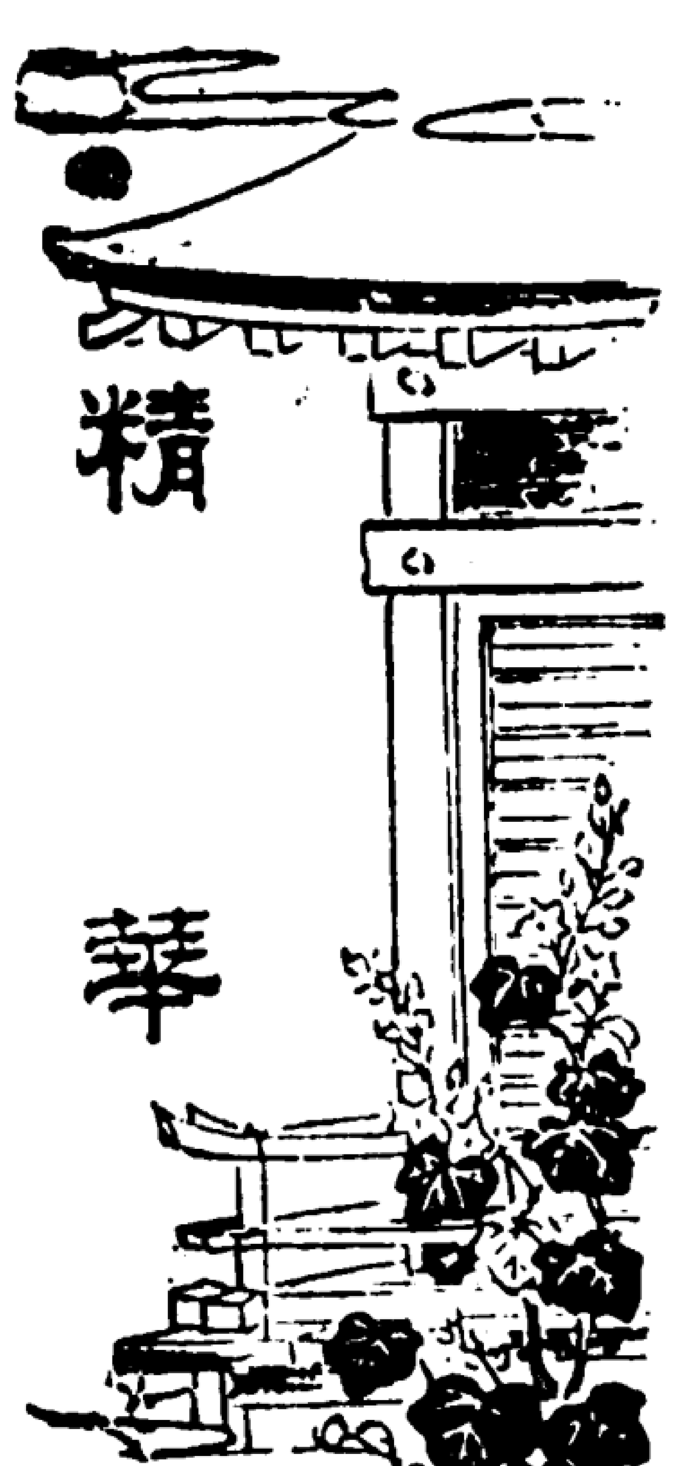
近時の道德が、動もすれば、報酬的の傾向を帶び來れるは、われ等の常に心を痛むる所なり。いまだ金鵄勳章を得んがために、砲彈を侵し彈雨を蒙むるとするものはあらざるなく、學士、若しくは、博士の名を得んがために、學術を修め、學理を研究するものはあらざるべしと雖ども、閭里の貧しき民が、その女を產むを喜ぶが如く、中等、若しくは、その以上の家庭に於いても、その子弟が、既に一個人として立つを得可き資格を得るや、その多年の鞠育を名として、之にその報酬を求むることあるは、われ等の屢々耳にして、快しとせざる所なり。普通の生活を營まむとするものにも、その漸くに、身を立てたるの曉、忽ちにして、報酬を迫まるものあらば、爲に、その成効の完きを缺かしむること、實に大なるものなり。然るを況んや、心を全く利慾の外に措き、身を退けて社會活劇の場裡に投ぜず、靜に宇宙の眞理を講じ、徐ろに濟世の大義を案ぜんとするものに對して、切りに迫りて、その報酬を需むるが如きあらんか、

その人の成功、遂に望むを得可からざるものあるに至るべし。如此はわれ等が學校生活に於いて、屢々、之を目撃せる所にして、小學の同窓は、中學の同窓に倍し、諸種高等學校の同窓は、中學の同窓に半ばするあるは、その質學路の驗難のみにはよらずして、家庭がその子弟に迫りて、報酬を求むることの急なるに因れり。われ等が經驗のみよりも、幾多小學の秀才が、遂に呉下の阿蒙に止まれるを嘆ずること尠からず。これわに、家庭が學界のため 、從つてまた、社會國家のために、犯せる所の罪の大なるものにあらずや。我れは天下の家庭がその、子弟に報酬を求むる所の弊を矯めて、除ろにその來るへき時を待たんとを望む。かくの如きに急なる求は、報酬そのもの丶上より論ずるも、敢て利得とせられざるべけれはなり。第二に、我が要求せんと欲する所は、か丶る子弟を有する家庭は、その子弟の天才を助長するに勉め、心を用ひて、その志す所を枉げしめざらんを勉むべし。

子弟か志を立つるは、容易なる事にはあらず。或時には甲に動き、或時には乙に變り、常に揺亂して、定まる所を知らず。志已に立つか如くにして、却つて大に惑るもの、比々皆之なり。この際に於いて、家庭に父兄たるの人か心を注ぐべきは、その子弟の天才が發達する所を妨げず、益益、之が助長に意を専らにせしめ、子弟をして、自らその分を悟り、その天職を知らしむるを、勉むるにあり。かくの如くにして、子弟の志一たび立つを得んか、父兄は、更に心を勞して、忍ぶべからざるを忍び、その志をして枉げしむるとなく、遂に能く是を就すの日を待つべきなり。父兄か、その子弟の天才を悟らずして、妄にその志を

立つるに干渉し、或は、子弟が立てたる志を蹴さしめて、幾多の天才を我が學界に奪ひ、數千の偉人を我が國家社會に亡はしめたるもの、實に枚擧に遑あらず。これ亦われ等が長き學海の航路に於て、既に、屢、心を傷ましめたるもの。或は文筆の雄を稱するに足るべきものにして、早く既に牙籌を事とせざるべからざるものあり。或は濟世救民の術を講ずべきものにして、徒らに馬上に劍を按ずるものあり。唯り、その子弟の志を成さしめざるのみにあらず、强ひて枉げしめたる方面に於いて、その成功の域に達せしもの果して數ふるを得へきか。醫者の子弟は醫者たるべく、儒者の子弟は儒者たるべしとの如き、狹き見解を抱持して、世人は何れの日にか、克く國のために盡くすを得べき。

嗚呼よき家庭のなすべき事は多し。されど、その子弟を誤らざらんがためには、その學問的嗜好わる子弟を善導せんがためには、必らず先づ、上陳二ヶの事を注意せられざるべからず。これ實に家庭が、國家に負ひ、社會に對し、學問のために、盡さざるべからざるの義務にあらずや。



忍耐

人は、常に温和の心を持し、いかに腹立たしき事にあふとも、よく、忍耐して、容易に怒るまじきなり。樂訓に、『凡、怒と慾とを忍ばゞ、心平に、氣やはらぎ、身安く、人にさはりなくして、恥なく、苦なく、後の憂なく、禍なし。忍の一事より、

萬の善き事いづ。忍ばざれば、萬の惡しき事、是よりいづ」といへり。

昔の人が、能く、忿を忍び、終に、其の身を、顯達に至らしめたる例の多きは、忍の一字より、萬の善き事いでたるものといふべきなり。

凡、怒りを忍ぶは、必しも、大事に志し、大業を企つるに缺くべからざるのみならず、日常、家居百事、皆、此の心得にて處理するにあらざれば、一族和合して、家門の繁榮を圖るべからざるなり。忿を制して、能く忍ぶことを得ざれば、人と共に、事を行ひて、平和に成し遂ぐること能はず。人生の事、得意快適の事は寡く、失意慊焉の事は多し。特に、人に交はるには、忿恚に堪へざることも起るべし。忿怒の情を恣にせんとすれば、仇敵をのみ生じ、禍害幷び至りて、悲慘に陷らざるもの、幾、稀なり。能く、忿を抑へて、此の禍を免れ、身を全し、心を安んずるは、忍耐にあらざれば能はず。是忍の、萬善を生じ、不忍の、萬惡を生ずる所以なり。省心錄に曰はく、和げば、仇なく、忍べば辱なしと。人は、常に此の言を服膺せざるべからざるなり。

永村三右衛門の妻

田山とり子

なにがしの賢人の言ひけむ。亂世の忠臣たらむはやすく、治世の良臣たらんは、難しと。實に然ることなり。然れば、亂世の忠臣だに、いといと得難き世の中に、治世の良臣など、ほと／＼望みがたなきに似たり。

九州の某大藩に永村三右衛門といふものありけり。文武の道にも拙からざりしを、不圖せし情義にからまれて、其の國の先進に與し、明治十年の

ころ、罪を國家に得、遂に刑場の露と消えぬ。妻さた子、其のころ二十五六なりき。男女二人のの幼兒を守り育てけり。常に、夫の罪を悔いおそれ、幼兒にむかひては、父上の罪を償ふまでに、國家のために忠義をつくせかしと、言ひさとし、敎へみちびき、神に祈り、佛に念じてさへいつくしみ育てけり。男の子やう〳〵成人しければ。即ち、陸軍の學校に入れ下士たりしめしが、廿七年の役、名譽の戰死を遂げたりき。この報さた子の許に達せしとき、さた子は、いと喜びて、我が子よく父の罪の萬一をつくなへりとて、神佛の前に報賽し、また、これまではつゝしみて里人ともあまり往來せざりしが、今は、昔の罪もゆるさせたまへとて、里人にわびごとし事ある折には、往來する様になりしかば、里人も、皆、其の志に感じ、敬ひおそれて、我が里にかゝる人を得たるは、我が里の名譽なりとて、譽めたゝへぬはなしといふ。かゝる人や、男ならましかば、治世の良臣たらむかし。

孝行なる三人姉弟

大井つな子

前號にて、ゆかしき二葉のみどりとて二人の姉妹の心づくしを記されたりき。げにいとゆかしき人人にもあるかなとおもふにつけても、わすれがたきは、わが國の三人の姉弟が、病める母に仕へしものがたりなり。傳へられたるまゝを錄して、諸媛に示しまゐらす。これはた容易にえがたき人々なれど、讀みもてゆくにしたがひ、よく心にとゞめて、われもまた、この人々におとるまじと、心かけたまへかし。

和泉國南郡下池田村に、百姓喜右衛門といふ者

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おり。一男五女をもてり。姉の名はきく、次はきわ、さつ、かめ、ふり、弟は長藏、後に改めて又、喜右衞門とぞいひける。享保十六年、父の喜右衞門病みて死にき。時に母とし四十六長藏わづかに四歳、もとより、高もたぬ百姓なるに、家族多かりければ、姉二人つゞ年々に人に仕へて世をわたりしが、母病の身となりしより、姉二人三人づゝ、かはる〳〵、出でゝ仕へ、その給銀をもて母を養ひ、弟をもはごくみけり。寛保三年の比より、母、中風の病に罹りて、身いたみ起ち居かなはず。喜右衞門もはや、成長しければ、姉と弟と六人にて、世のいとなみもくるしきを、母のなげきて、姉どもを外によめらせむといへど、老いたる母をみすてがたく、よめいりすべき心はあらねど十年あまりさきに、同郡加守村の淸三郎といへるもの母に乞ひて姉きはをむかへ、六七年前に神須屋村の傳七も、姉かめをめとりけり。のこれる三人の姉おもふやう、此の後も又は我々が身をむかへまほしと、母にこふことあらんに、この時にいたりてうけがはずば、母の心にもやそむかんとて、こふ人なきやうにぞ相はかりける。はじめ人につかへ、又は、其の日〳〵にやとはれゆきても、團子麥粉又は菓子やうのものあれば、みづからは、くはで母にすゝめ、遠き村につかへても、主の用をかく事なく、おのが二日のつとめをも一日にあはせ、そのいとまには、母をかへりみ、遠き村につかへし時は、日々に一二度もしかせり。喜右衞門も、いかで母の病いえんことを神佛に祈りしこと數をしらず、伊勢の大宮居に七度、京なる愛宕山に五度、吉野山の神には、年々にまうで、住吉には二三年がほどに七日詣などしけり。寛延元年の春、母あたご山にまうでゝ、おのが病をいのらましといふ

に、喜右衛門は母を負ひ、姉きく、つき添へて詣でけり。その道すがらの費は、喜右衛門が耕作のいとまに、日やとひに出でしわづかの償をたくはへ置きしなれは、朝夕のくひものには、麥粉を食し、あるは道にて人に物こひなどせしとぞ。その外神事佛事などに、物みんといへば、喜右衛門が背におひ、姉三人が内一人はしたがひ、寒き時は暖にきせてぞぐしゆきける。すべて、母の食物は別に調じ、母の好むものは、なにゝてもすゝむれど、あらたに求めしといへば、母のさなせそといふを恐れ、隣よりおくれる物なりなどいひ、姉弟にも、ひとしくくひてよといへば、粗食のうへに飯をおほひてくへり。衣又はよるのものも、母にはよきをきせ、姉弟はつゝれさしてぞ着ける。冬の比は、わけてあたゝかならしめんとすれど、心のまゝならねば、母をも中にいねさせ、姉弟左右にまどひてぞふせりける。母の髪は、喜右衛門手づから日々にゆひ、朝夕の湯あみ足あらふなど、老ほれたる人のいとふもいとはず、起臥二便食事の時など、姉弟してたすけ、中風の病なれば、膝のいたみのつよかりしをも、心のまゝに養ひぬ。

喜右衛門元は高もたぬ百姓なりしが、庄屋年寄などいへる者、心をそへて、六七年さきに田一段ばかりをゆづりうけ、居やしきも、此の年の春ゆづられけるに、母のよろこび斜ならず、せめて、庄屋の次右衛門には、酒にてもすゝめまほしと願ひしに、三月十二日、喜右衛門が家にまねきしが、其の家わづかに竪二間半横三間半ばかりのわらぶきの家に、むしろをしき、母をば薦の上に薄團しきてをらしめ、次右衛門は、母のいふにまかせて、上の床に敷物しきてぞ請じける。酒肴などまうけてもてなしけり。かゝることにても母にこひて其

のむねにまかせざることなく、姉は弟にゆづり、弟は姉をうやまひて、兄弟の中もむつまじかりき。此の事いつしか世に知らぬものもなくなりければ、幕府にきこえわげて、姉弟四人に銀そこばくたまはりけり。これ寶暦十二年のことなりき。



家政

女禮稽古の仕方

有住つね子

飯たべ様　付禁忌の條

先、膳に向ひ、主人あいさつわらば、列座見合せ一同に飯椀の蓋を取るべし。取り様は左手にて飯椀の蓋を取り、右手をそへてとり直し、左の膝わきの方にあふ向けて置くべし。此の時湯げのしたたり落ちぬ様にすべし。汁の蓋は、右手に取り、左手をそへて取置べし。右の方膝わきに置く。次に壺のふたを取る。飯椀の蓋と並べ置く。總て、左の物は、左にて取り、右の物は、右にて取る事と心得べし。

先、飯をたべる。

兩手にて、飯椀を取り、左の手の平にすゑ、右手をあふ向けて下より箸をとり、飯椀を持たる、左手の四五の指の間に挾み、持直して、二箸三箸程たべ、又箸を指の間にはさみて、下より持ち膳に置き、箸の取り様は、毎度にかくの如くにてかはる事なし。兩手にて飯椀を置くべし。

次に、汁を吸ふ。

兩手にて、汁椀を取り、一口二口吸ひて、箸を取り、實を二箸三箸たべ、箸を置き、又汁を吸ひて

膳に置くべし。品により、箸にて身をおさへて、汁を吸べきこともあるなり。

次に飯をたべ、次に汁を吸ふ。

二度目よりは、實を先にたべ、汁を吸ふべし。

次に飯をたべ、次に菜をたべる。

菜は、本膳の鱠よりたべるなり。左手を膝もとにつき、右手にて、下より箸を取り、左手をそへ、持直し、左手をつき、膳に置きながら、箸にて、皿のはたへ挾みよせ、酢のしたゝり無様にして、一箸二箸たべるなり。

次に飯、次に壺。

兩手にて、壺を取り上げ、左の手の平に置き、前の如く箸を取り、實を一箸二箸たべ、汁あらば、箸を膳に置て、兩手に持吸ふべし。汁の無き物は、下に置てたべる事式法なり。

次に飯、次に二の汁。

右手にて、汁椀の蓋を取り、左手をそへ、右脇に置き、右手に左手をそへ、椀を取り、左手の平に移し、箸を取り、實をたべ、箸を置き、兩手にて、持て汁を吸ひ、其儘にて膳に置くなり。

次に飯、次に平。

蓋を右手に取り、右脇に置き、右手に、左手をそへて、椀を取り、左手の平にうつし、箸を取り、平の中にて程よく挾みきりてたべるなり。つゆあらば、箸を置て吸ふべし。中の品をあれ是とたべかけおかぬものなり。

次に飯、次に三の汁。

左手にて、蓋を取り、右手をそへて、左の脇に置き、汁椀を兩手にて取り上げ、右手をそへ、左手の平に据て、箸を取り、實をたべ、はしを置き、汁を吸べし。

次に飯、次に刺肉。

左手をつき、右手にて下より箸を取り、左手をそへ、箸を持直し、少し、左へ居向きて、刺肉を、二箸程猪口に狹み入れ、箸先をそろへ、膳に置き兩手に取り上げて、左手に据ゑたべるものなり。

次に飯、次に猪口。

兩手にて、猪口を取り、左手に据ゑ、箸を前の如く取りたべ、兩手にて下に置くべし。されども餘り、心のまゝにたべるは宜しからず。

次に飯、次に鱠。

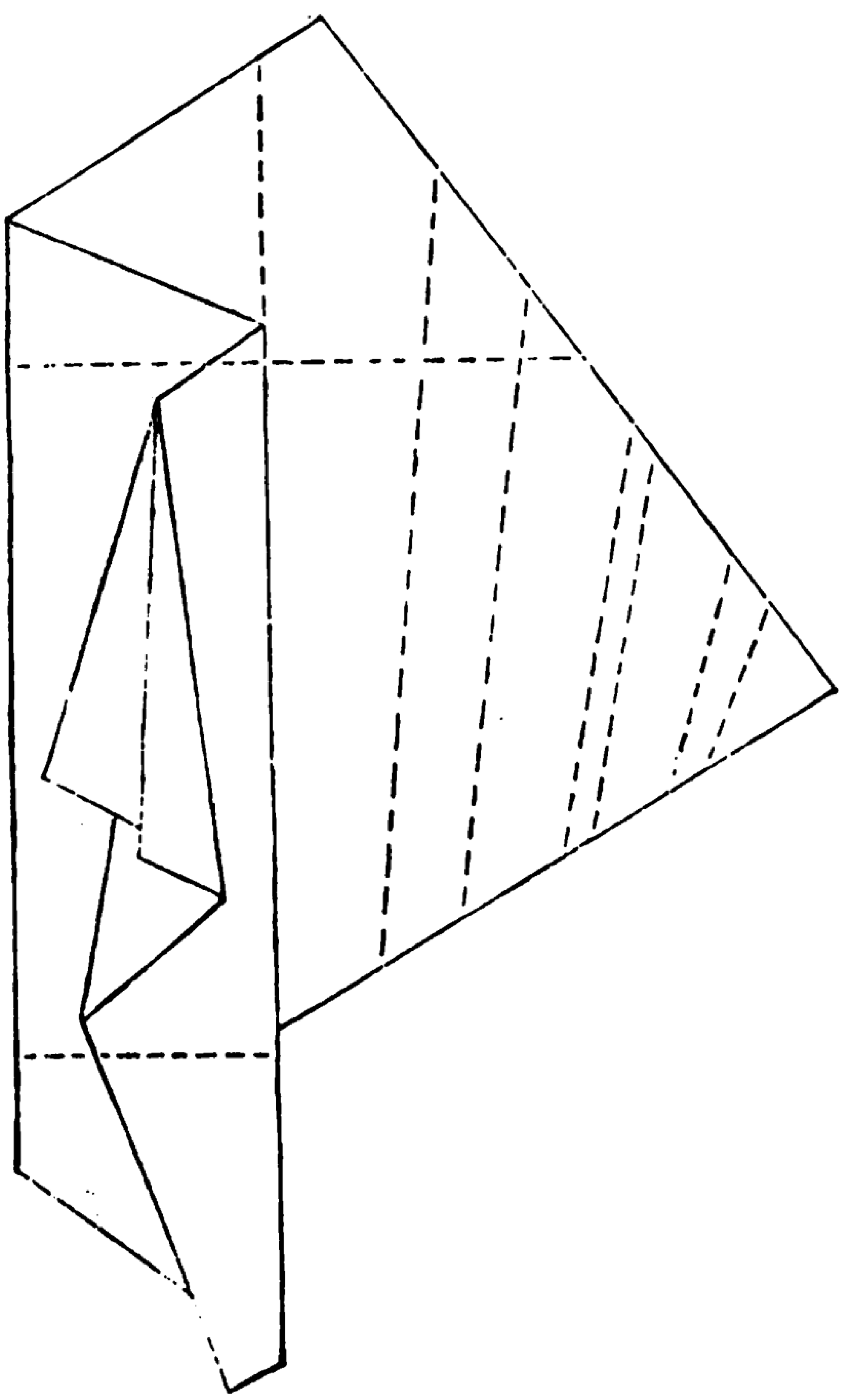
食初めの菜にてたべ終るを、始終の禮といへり。時宜によるべし。

次に飯をたべ、箸を納むべし。

折方

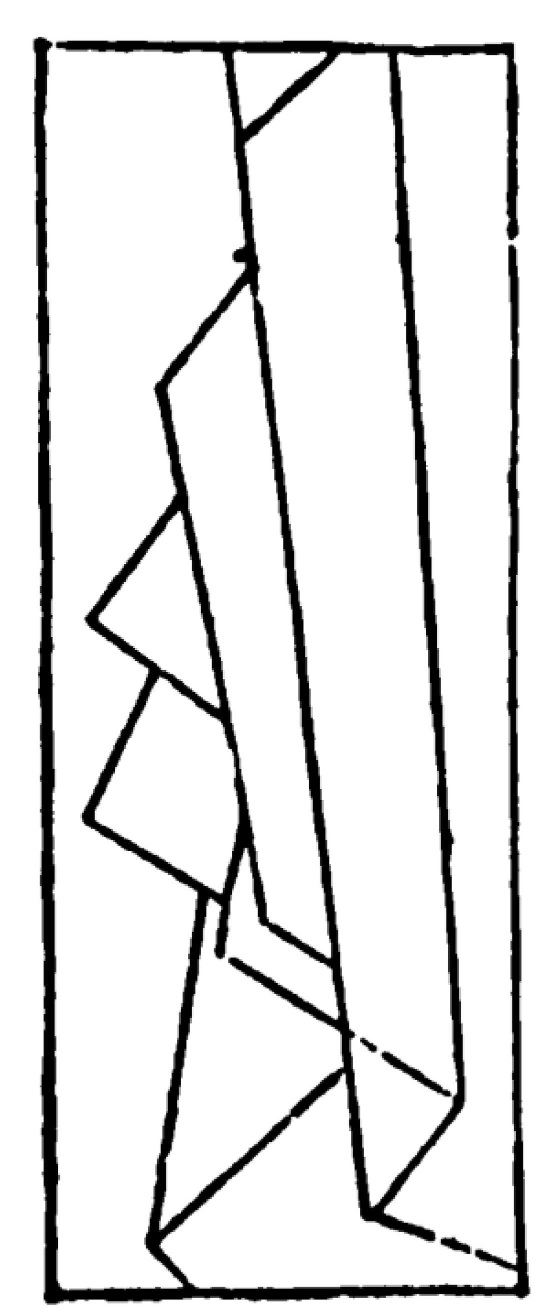
五對の筆包　有住くわう子

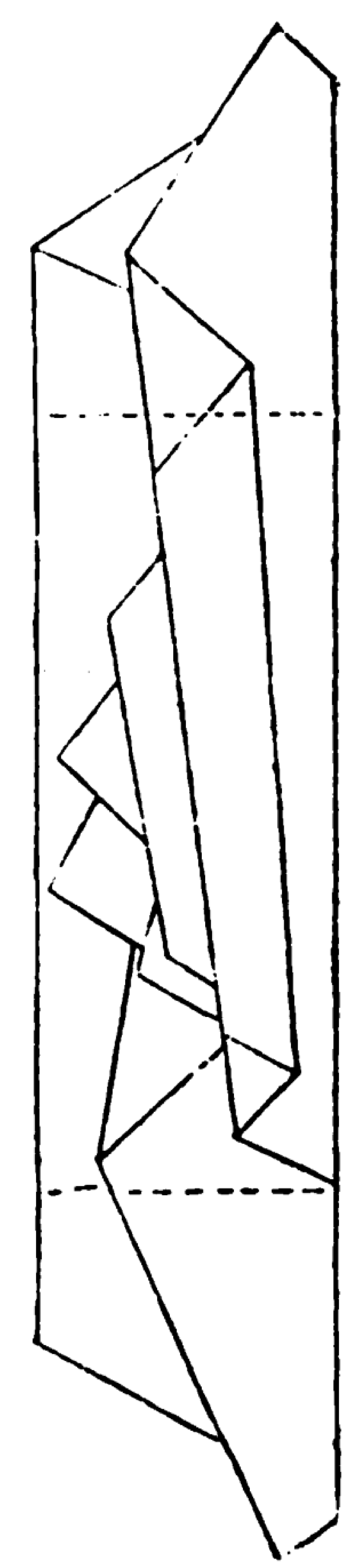
是は、まゆ又は、おはぐろを付くる時に用ゐる品にて、其の包みかたなり。





(折りあがり)





Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

茶の湯

茶禮初學

孤峯菴祿仙齋川上不美

關　葦雄

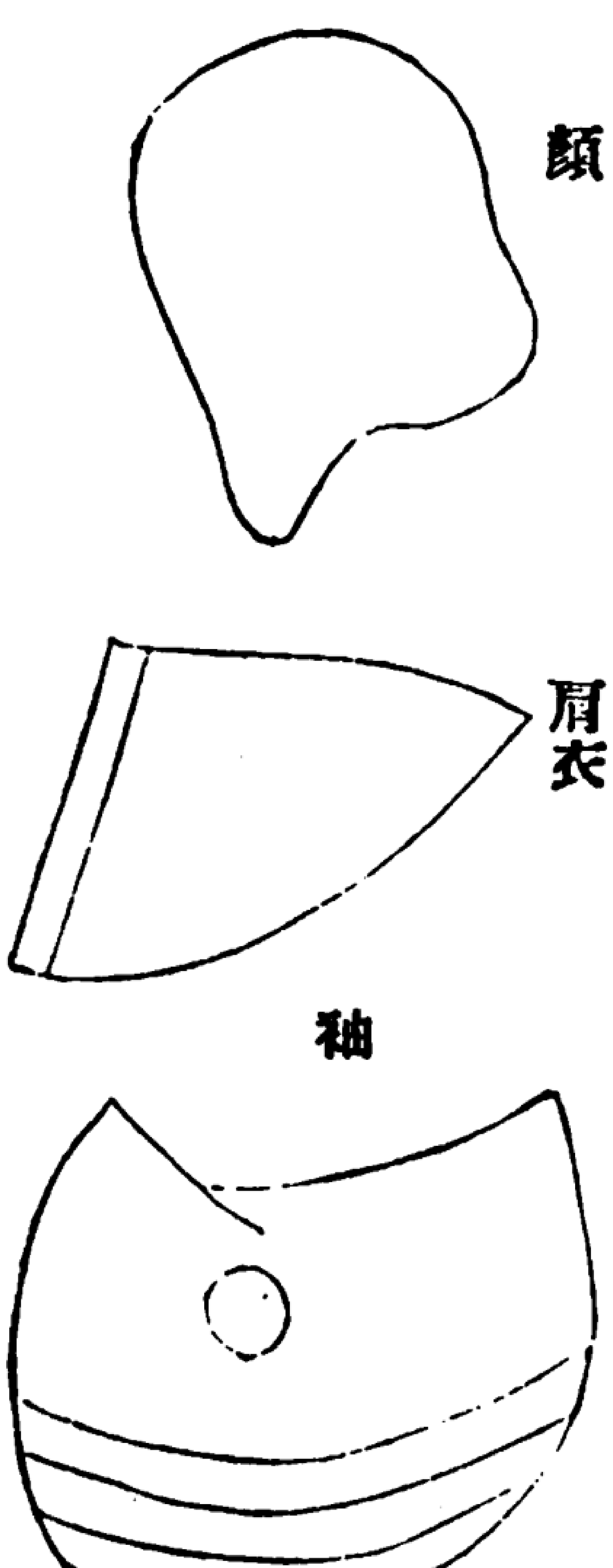
不美曰、先づ圖式の丸卓にて點る時は、例の通り、茶椀を仕籠、持出て、棚前に座し、(但爐の點前也) 茶椀、左の手に持ち左の方壁に付け、膝頭より、僅少出し、假置して、右手にて、棚の上の棗を、上より持ち卸し、水滴の前、右の方に置き、左手にて、假置の茶碗を取り右手にて持ち、左手にて、滿中を持て、置合す。立ちて、勝手に入り、建水へ、柄杓蓋置仕籠、左手にて持ち出で、居前に座し、直に柄杓を構へ、蓋置を置付け、柄杓引き、居前を直し、(但し、此の居前の直し方に大に口傳あり、餘り我儘氣隨に身體を動搖しては、卑劣に陷り、品行不宜、物靜に目立たざる樣に直すべし) 夫より、點前に取掛るべし、以下は前號中に續々掲載しあれば爰に省略す。都て棚物にては、前の飾りと替るを以て本分とす。故に始め、棗飾ならば、次には、杓柄蓋置、又は總飾と唱へ、柄杓、蓋置、茶入茶碗を飾るを、交々にすべし、柄杓を飾るには、仕舞に水を差たる時、必ず湯返しすべし。(但し、湯返しは、水の仕舞を釜の中へ切籠釜中の湯を汲上げて、釜中へ注入るべし。此の湯の温度にて、柄杓の合の濕氣能乾くものなり(或は總飾をせんとする時は、茶筅濯の水を翻て、後是を茶を點る時の如く、茶巾にてふき、直に此の茶巾を絞り、疊み直して、茶碗を拵へ、

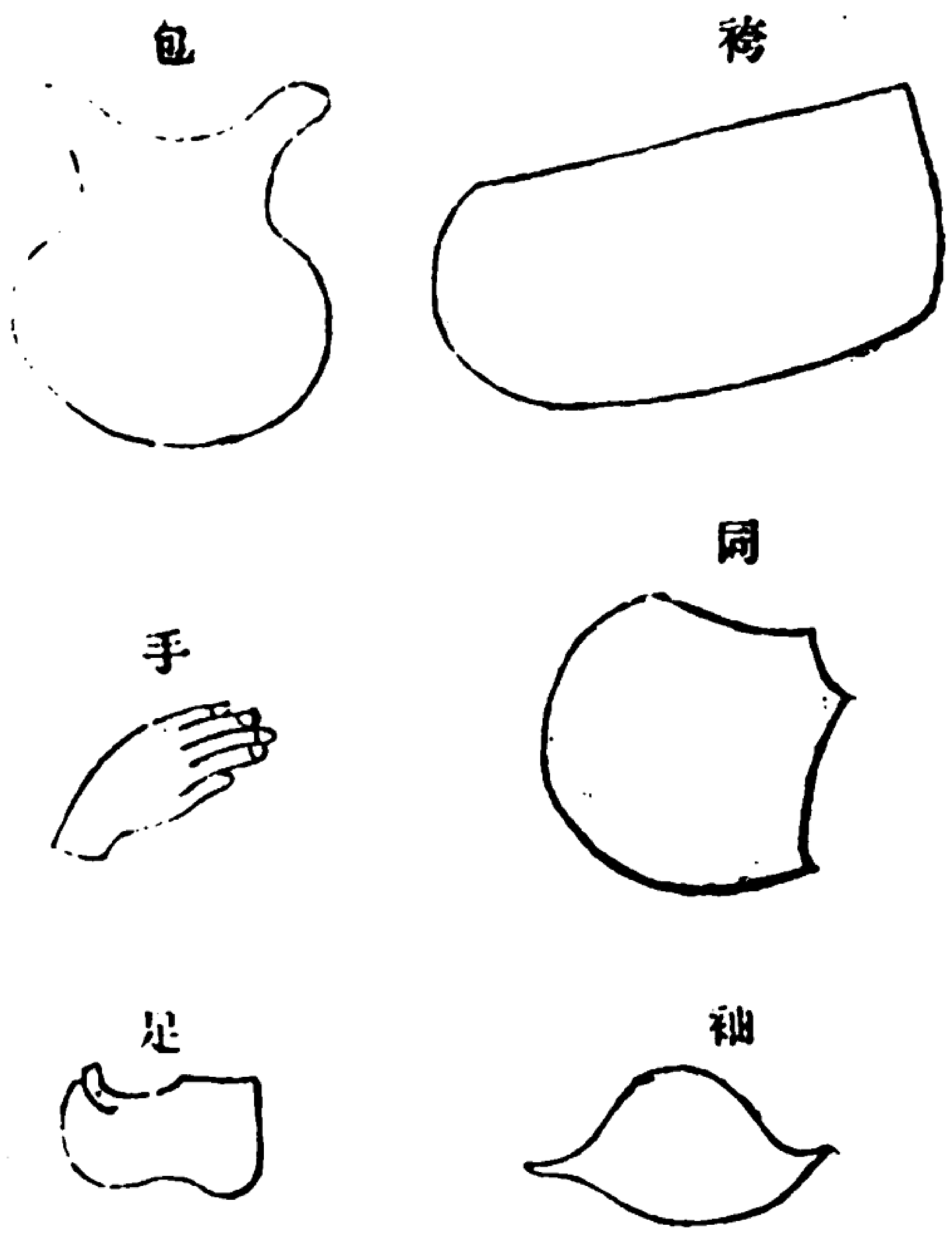
例の如く、一旦水指の前へ置き合せ、湯返しをしたる柄杓を持ち、左手を添へ、右の手を柄杓の柄の下より持ち、棚の上へ柄杓徃ながら合を返し、則ちうつむけながら、棚の上の方へ、眞直に飾り、蓋置を持て棚前へ居直り、水指の前に置き付け、兩器を上へあぐべし。(但し、右の手、茶入の方手丈け、早く出し、置付けたらば、些少早く引くべし。左手は、些少遲く出し、遲く引べし。底で、又、棚物は、都て水指置付け、有故、跡にて水を差足すべし。其の時には、水屋常備の藥鑵の蓋の上に布巾を疊乘て、持ち出で(但し藥鑵の蔓を、手に持ち、口を右の方へ向け、兩手を添て、持出で、棚前に座し、左の方に置き、兩手にて、水指を前に出し、右手にて、水指の蓋を取り、左手にて、水指へ、立て掛け、右手にて、茶巾の口の下部に當、蔓を左手にて持ち、右手の親指にて、藥鑵の蓋を押へ、水を指すべし。差足終らば、布巾を口の下部より離す時、口の邊を拭ふ樣の心持あるべし。元の如く、布巾を、蓋の上へ置て引入るべし。棚物は、是にて一と手前決了す。藥鑵なくぞ、木地の片口にてもよし。

たちぬひ

脊負まもり (承前)

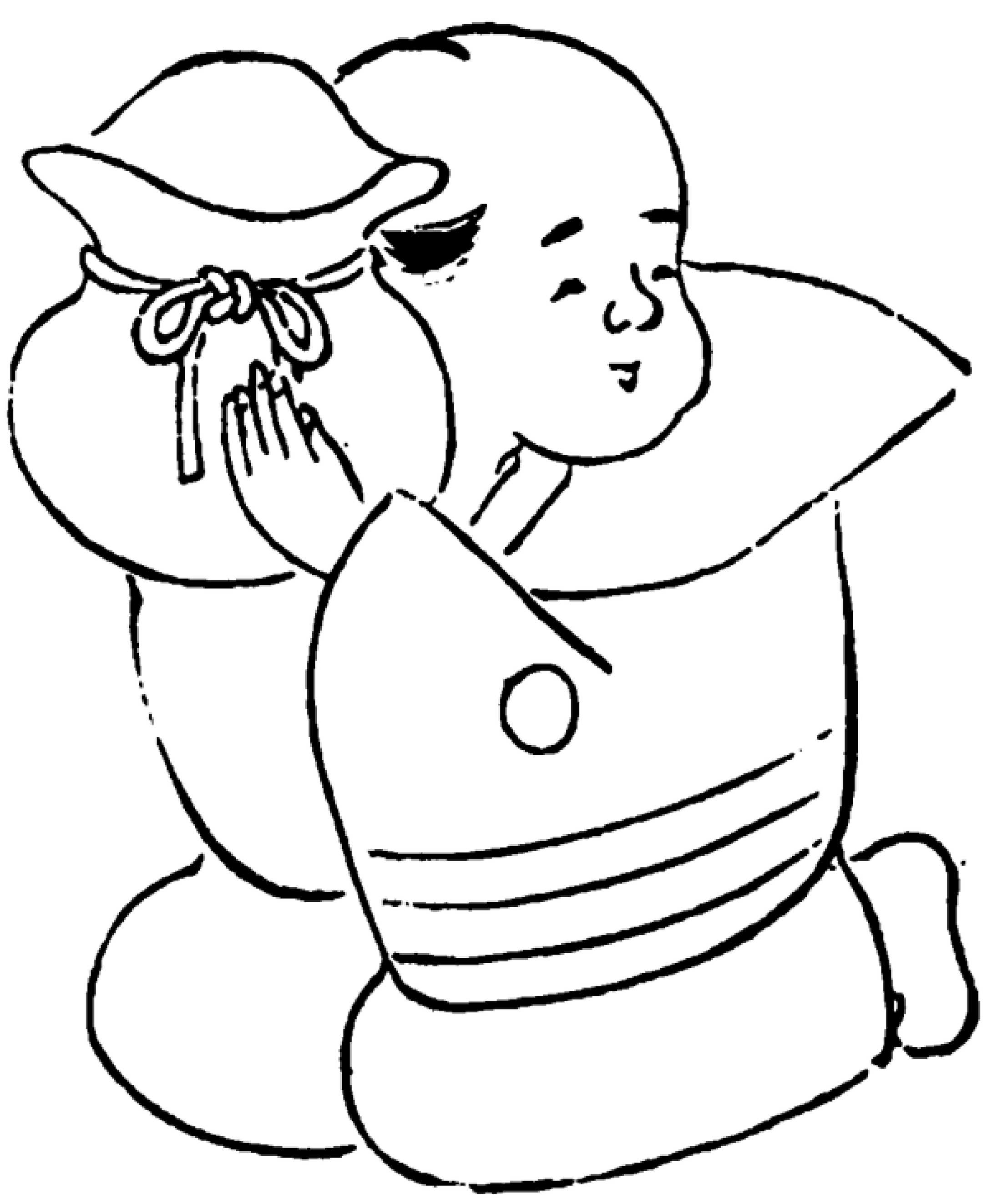
西山いよ子





まづ、右の圖の如き、形に厚紙を切り、袖と袴には、綿を多く入れ、肩衣には入れず。福包は、眞中を高くするやうにして、切を被せ、顔と手足は、白絹にてつくり、目鼻、指をかきおくべし。福包は、上の三角形したるは、裏の見えたるさまにてそれに下の表をはりつけ、糸の打紐をつけおくべし。左の圖の如く組み合すべし。

（その圖）



だいどころ

伊勢海老魚田

先づ木のめを摘み、よく洗ひ、水氣を去り、摺鉢にて、よく摺りつぶし、味よき白味噌を裏漉にてこし、木の芽に摺り交ぜ、味淋にて、能程にゆるめ置き、伊勢海老を、さつとゆがき、皮を剝ぎ、

二つに割り、青串に刺し、さつと焼て、胡麻の油を塗、又焼て、前の木の芽味噌を、両側に塗り、炙りて出すべし。

こはだ夘の花

こはだを、三枚におろし、腹部の骨をすきとり、はそくきりて、酢につけ置、豆腐のからを、擂鉢にて、能く摺り、裏漉にてこし。鍋にいれ、味淋醤油にて塩梅したる汁にて、能く煎りつけ、器に盛り、前の酢につけ置たるこはだをしぼりて、其の上に能程にのせ生姜のせんを少しふりて、出すべし。淡白にてよきものなり。

わらび松露からしあへ

わらびを桶にこれ、灰をすこしいれ、沸湯を注ぎふたをなし、暫くおきて取出し、能く洗ひ、穂先のところを、能程にきり、さつと湯煮すれば、あくぬけて、やはらかになるなり。又、松露を、小口より薄くきり、さつとゆで置き、からしのあくを去り、擂鉢にて摺り、醤油にて能程にのべ、前にゆで置たるわらびと、松露をあへるなり。

松露飯

松露を能く洗ひ、薄くきり湯がき、味りん醤油にて、能程にあぢをつけ、飯を焚き、飯びつに移すとき、交せ合すなり。

栄花園

春のくさ木くさ〴〵

○桐　種類には、白桐　黄桐　紫桐　椅桐等あり。
桐は、木材中、貴重なるものにして、其の用の廣き事は、云ふも更なり、生長甚だ速にして、是を植うる時は利尠からず。木質やはらかにして、おれがたく、形直くして拮崛なし。其の葉は色異

清にして、形やさしく、大にして心廣ろやかなるがごとし。花はこよなきゆかりの色にして、優美、またたとしへなし。眞に諸孃諸媛の良鑑なり。豈それ省ざるべけんや。

○梧桐　桐に似て、皮青く、疎皮なく、葉の形、少し。むかしは、此の木の葉をかそひて、日月の閏を知れりとぞ。そは、其の下の葉よりかぞひて十三枚の中に、かけて小葉あれば、其の月閏なりと云へり。また鳳凰の栖は、此の木にありとも云ひはやせり。

寂蓮法師が歌に

百敷や桐の梢にすむ鳥の
　千とせは竹の色もかはらじ

○檀芸　杜仲　思仙　木綿とも云ふ。

顯輔が歌に

苔のむす岩かきまゆみ色ふかし
　是を嵐にしらせずもがな

○枳花　かとわに廻らし、おそろしきとげあるものは、枳なり。葉は橙ににて、木は橘のごとし。花は、白くして、木のさまに違へて、いとやさし。此の種にぞくするもの、多くは此の月にはなを開く。

△蜜柑花　大和本草に、其の花をハナタチバナとよめり△柑子花　花柑子とも云ふ△乳柑花　久年母とかく、花橙に似たり　△橙花形少さく、色白くして、一所に數個を生ず△柚花　樹も葉も、皆橙に似たり。花甚た香ばし△金柑花　花白し△雲州橘花　も花玄ろし△佛手柑花　實熟して、人の手に似たり。故に名づく。

○橘　包橘　盧橘　軒生草　昔艸　庭古艸　とこよ花とも云へり。さて橘とは柑類の惣名なり。世にたちばなと稱するは、包橘の事なりとぞ。

萬葉に

橘のかけふむみちのやちまたに
　ものをそおもふいもにあはすて

また家隆朝臣は
　今年より花咲きそむる立花の
　　いかで昔の香に匂ふらむ
清輔公は
　君が代に枝もならさで吹く風は
　　花たちはなの匂にぞしる

○厚朴花　葉は槲の葉に似て鋸齒なし。大なる物、尺に及ぶ。花は女郎花に似て大なり。秋實紅く熟す。千年菖の實のごとし。

五月手入すべき事(1)

見わたせは野の末山のはてまでも、花なき里もなく、鳥なかぬみねもなし。井手の山吹さきみだれ哥まをしわぐる蛙も時節からにや、おもしろうきこゆ。いて〳〵おのがにはにも、四方の春を集へなん。

分栽すべきもの
　菊苗　菖蒲　麥門冬　桃絲竹　虎散竹　蘭蓀

移植すべきもの
　梔子　菖蒲　枇杷　橿　建蘭

杆挿すべきもの
　茉莉　木香　梔子　石楠

接換は　是月の初旬に宜し。

厭條
　木樨　淵毬　千葉辛夷
　塘蒿

せるりーは近年渡來せるものにして、葉莖の軟化



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

したるものに、鹽を附けて食するを常とし、其の香のよきを賞するものなれども、本邦に於ては、未だ廣く、栽培するに至らず。其の種類の如きも、おまたあれども、本邦に傳來せるものは、少なし。

種類、トワーフ、ゴールデン、ハート等あり。

うゑ方 本月はじめ冷床に播種し、二三寸に生長したる頃、再び、他の苗床に移し、七月に至り、畑に本植すべく、堆肥人糞を施せば、長大なるものを生ずるものなり。之を移植するには、畦巾二尺距離一尺乃至一尺五寸とすべく、之を軟化するには、秋末に至り、畦の兩側より、高く土を寄れば可なり。

山葵

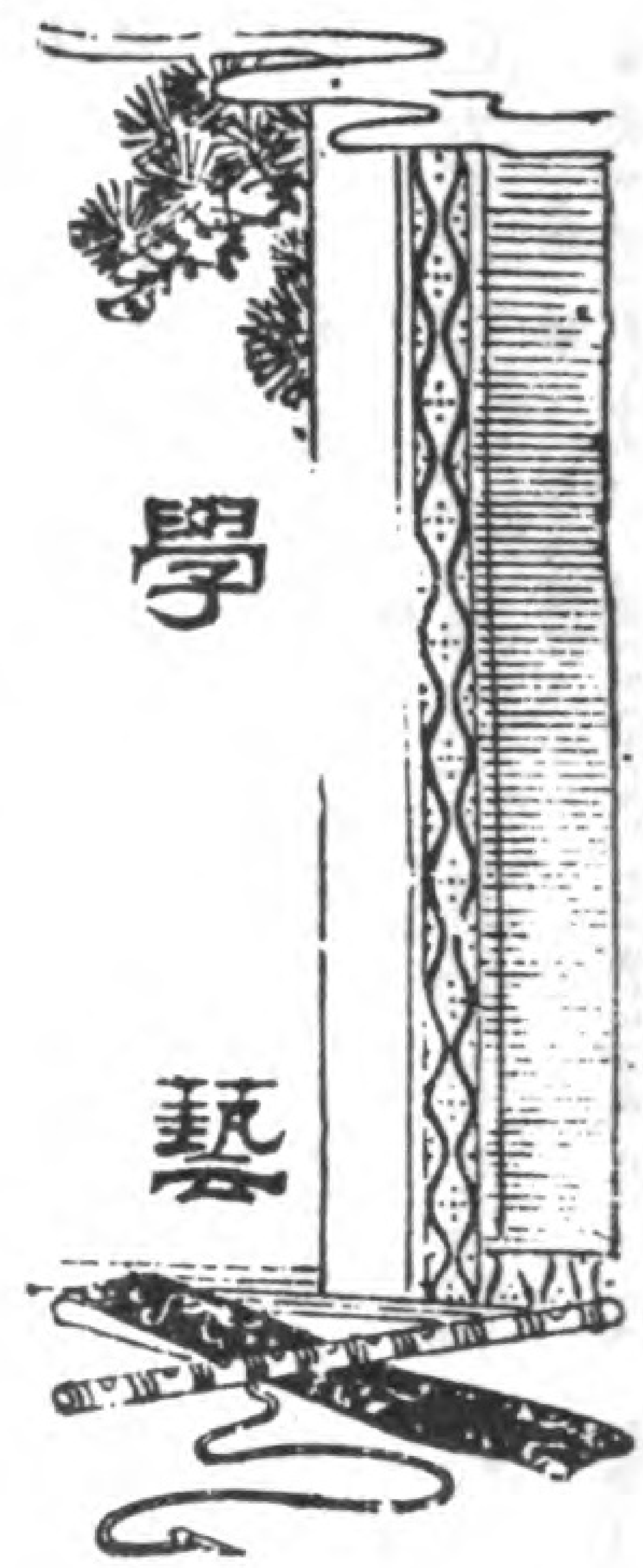
山葵は、辛味料中最も、貴重せらるゝ種類にして、古より、我が國に栽培せられたるものにして、特に遠州または三河國、賓飯郡地方埼玉縣北足立郡

は、最も擴く、培養せられ、優等品を産出せり。而して、此の植ゑ物は、獨り蔬菜品として、貴重せらるゝのみならず、輸出作物として、海外に盛に輸出せらるゝものなり。

種類

名稱	根塊の大小	香辛の多少	摘要
赤薑	小	多	普通種にして栽培十貫により柔種硬種の別を立つるものあり
白茎姜	小	多	普通種中の變種にして埼玉縣下に産するも需用少なし
大姜	大	少	普通種よりも品質劣惡四國邊に多く栽培す
清國大姜	大	稍多	前種に似て香辛強し或は前種さは全一種なるべし
印度大姜	大	夕	末た渡來せざるも收量香辛共に姜中の優等種なり





國文學講義

磯野德文

（五） 孝行

父母の恩、きはまりなきこと、天地にひとし。父母なくば、何ぞ我あらん。其の恩、海よりふかく、山より高し。海山は限あり。父母のめぐみは限なし。いかにしてか、其の恩を報いんや。たゞ、孝を行ひて、其の恩の萬一を報ずべし。

父母につかへて、其の力をつくして、をしむべからず。力とは、身と財との力をいふ。身の力の限をつくして仕へ。財の力の限をつくして養ひ、其の力を惜むべからず。

わかき時は、われも人も、父母の恩を思はず、力をつくさずして、不孝を行ひ、父母をはりて、後悔すれど益なし。是、一生の限なき恨なり。人の子たるもの、後悔なからん事を思ひ、父母いける時、力をつくして、孝を行ふべし。一日も、孝を行はずして、あだに過ぐすべからず。父母に仕ふる年は、久しからず。「孝子は、日ををしむ」といへる事、心にかくべし。

○この文は、貝原篤信が書かれたる大和俗訓といへる書の一節なり。篤信は、筑前福岡の人なり。字を子誠といひ、號を益軒といへり。篤實温厚の人にて、著書の數もすくなからず。正徳四年八月廿七日、よはひ、八十五歳にてみまかられたり。

●父母は、「フボ」または、「チヽハヽ」ともよむべし。

恩は、オン、天地は、テンチまたは、アメツチとよむ。何ぞは、ナニぞ、我は、ワレ、海は、ウミ、山は、ヤマ、高しは、タカし、限は、カギリ、報いは、ムクい、孝は、カウ、行ひは、オコナひ、報は、ハウと、讀むべし。○父母、父は、チヽ、母は、ハヽにて、わが兩親なり。恩は、メグミなり。文字のこゝろは、辭書に、惠なり。愛なり。澤なり。私なり。隱なり。と見ゆ。我が身を生み、我が身を育て給ひ、ゆく末かけて、身は、健なれ、心は、すなはなれ、なは、立身出世して、國のためにも、君の御爲にも、功をたてゝ、人々にもほめられよ。何事にも善かれと、身にかへてもねがはるゝ、其の御心のありがたさをいふなり。きはまりなきは、果のなきなり。キは、涯のこゝろ、ハは、端のこゝろマリは、活らくことばにて、其の際にのぞむこゝろなるべし。ひとしは、等し。にて、ヒトツ(一)なるこゝろなるべく、即、同じきをいへり。父母なくば、何ぞ我あらん、父母は、我が身の生まれし本なれど、親なくては、我があるべき理なきをいふ。あらんのん、俗語には、ツとなりて、アラウといへり。ナンデ、我が身が、アラウゾと、力を入れて、反語にいへるなり。めぐみのめは愛づ、珍らし。愛たし。などのめと同じこゝろにて、惜しみ、愛するこゝろをふくめりと覺ゆれどいかゞあらん。いかにしてかのかは、疑のかにて、報いんやのやは、感歎のやなり。報いは、返禮、返報などいふに同じ。ムクイのムクは、對ク、向クなどのこゝろにて、善きことをすれば、幸福、之に應じ、惡しき事をすれば、わざはひ、之に應ずるよりいへることばにや。ただは、止の義にて、其の事、

一つに止まりて、二つならぬなり。孝は、まごころを以て、親につかへまつるをいふ。行ふは、身づから爲るをいへり。オコナふは、起ナふのこゝろにて、心に思ふことを、身のしわざに、おこしあらはす義なるべし。萬一は、萬分が一なり。報ずは、報ゆるなり。

●力は、チカラ、身は、ミ、財は、ザイまたは、タカラともよむ。仕へは、ツカヘ、養ひは、ヤシナひ、惜しむは、ヲしむと讀むべし。〇つかへは、ツク(付)といふことばの延びたるにや、尊長につき侍ひて、用をたすをいへり。力は、筋幹の約まれるなりといふ。こは、筋柄の約まれるなるべし。からは、よりの意に近く、もと、筋肉の伸縮によりて、起るからのことばにや。轉じては、財力、智力など、さまぐ\に用ゐたり。身と財と、身は、我が手足身體をいひ、財は、人の寶とするもの、即、貨なり。身の生活に不足なからしむるをいふ。惜しむは、失はんことを恐るゝなり。べからずは、ベクアラズなり。▲親につかへまつりては、我が身の勞と、財とを惜まずして、專、奉養を怠るべからずとなり。

●思はずは、オモハズ、不孝は、フカウ、後悔は、コウクワイ、益は、エキとも、また、ヤクとも讀む。一生は、イツシヤウ、恨は、ウラミ、子は、コ、一日は、イチニチ、過ぐすは、スグす、年は、トシ、久は、ヒサシ、孝子は、カウシ、日は、ヒ、心は、コヽロと讀むべし。〇不孝は、孝ならざるなり。をはりは、死するなり。後悔は、後にて悔ゆるなり。くゆとは、誤を知りて、後にて憂ふるをいふ。益なしは、甲斐なきなり。一生は、身の終るまでの間なり。恨は、

のこり多き意なり。子たる者は、子トアル者なり。いける時は、生きてゐる時、即、生前をいふ。あだは、徒、または、空しき意。久からずは、長からざるなり。心にかくべしは、我が心にかけて、忘るなとのこゝろなり。▲父母に仕ふる年は、久からずは、子の、やう／＼、生長するにしたがひて親は、いよ／＼、年老いゆきて、七八十歳をこゆるは、稀なるが、人の命の常なれば、行くさき、膝下につかふる年月も、思へば、長からずとなり。孝子は、日ををしむとは、日の經るにつれて、一日／＼と、親のよはひの、ちゞまる理なれば、孝心ある子の心には、日のきへゆくが惜しとなり。

漢文學講義

佐々木天游

題ニ某生書畫帖首一　林鶴梁

某生請レ余。題ニ其書畫帖首一。乃披而觀之。紙皆白質。未三嘗有ニ一人下レ筆者一。譬猶ニ渾沌世界一。吾因謂帖之有ニ題跋一。猶三世界之有ニ天地一。抑渾沌初開。先有レ天而後有レ地。有ニ萬物一。今題ニ帖首一。是先天之意也。自レ是之後。山嶽江海。人獸草木。千狀萬形。穰々而來。簇々而生也必矣。然則開闢之功。非レ余而誰。乃笑而書レ之」

某生、余に請ふて、其の書畫帖首に題せしむ。乃ち披いて、之を觀れば、紙皆白質にして、未だ嘗て一人の、筆を下せしものあらず。譬へば猶渾沌世界の如し。吾因りて謂ふ。帖の題跋あるは、猶世界の天地あるが如し。抑、渾沌、初

て開く。先天ありて。而後に地あり。萬物あり。今帖首に題す。是先天の意なり。是よりの後、山嶽江海、人獸草木、千狀萬形、穰々として、來り、簇々として生ずるや必せり。然らば、則開闢の功、余に非ずして誰ぞや。乃ち、笑うて、之を書す。

是は、書畫帖の初めに題するの文でありますが。某生の何の誰と申すものが、拙者に請ひ願うて、其の持てをります所の書畫帖の(書やら畫やらを書き集めて、一卷にこしらへましたものを、書畫帖と申します。)首めに、何か一言御題辭をと申して、差出しました。乃ちそこで手に取りあげて、どんな書畫などか書てあるかと披きあげてみました所が、紙は皆、白地(質は下地と云ふことなり。)のまゝで、まだ誰一人も筆を下して、書たものがありませんで、白紙のまゝで、書もなければ畫も御坐りませむ。何にもないので、譬て申さば、天地の未だ剖れずして、何んにもない、渾沌世界の様なもので、書も畫も、何一つもなく、白紙渾沌としてをります。(渾沌は、天地の未だ判れざる前の形にて、まろがれると云ふことなり。)玆渾沌世界と云ふ四文字が、此の文の眼目で御坐りまして吾より以下、結末に至る迄の文字は皆此の四字から孕み出されをります。

そこで、吾自分がそれによりて、謂ひ考へてみるに、渾沌世界の字を受けて、更に端を改めて、申しまするには、一體、書畫帖の題や、跋や、(題は、前にも申上ました通り、諦也で、其の意を審諦にすると云ふ意であります。跋は本也で、文に因りて、本を見すと云ふ義であります。又題と云ふは、額のことでありますから、前にあるを題と云ふ。跋は足後のことでありますから後にあるを

跋と云ふ說もありますが兎も角卷首に在るを題と云ひ、卷末に在るを跋と申しますが、敍文とか、引文とかと云ふものとは、少し異りまして、成丈簡勁な文字を貴びます）と云ふものが有りますのは、猶てうど、世界の天あり、地ある樣なもので題は、卷首にあるの文で御坐りますから。天の位で、跋は卷末に在るの文で、御坐りますから、地の位であります。で題跋が書畫帖の天地であります。抑（抑は發語辭にして、上を抑へ下を起すの詞なり。）世界が渾沌とまろがれて、何ともつかぬ中より、初めて開け判れて、世界と云ふものが出來ます時には、先づ最初に天がありまして、天と云ふものが、初めに出來ます。其の後で、地が出來、さうして、天と地とが出來ますと、天地の氣が物を生して、萬物で、人や獸や、鳥や、蟲や、草や、木やなどの樣々のものが、出來てきます。さうして、世界が、段々と成立てきますが、只今書畫帖の首に題辭を書きますのは、是、乃ち天に先ちて、混沌未だ開けざるの前に先ちて、其初をなすと云ふ意であるのぢや。（也は決語なり。）（先天後天と申すことが御坐りますが、先天とは混沌、未だ開けず形象未だ剖れざる前のことにて、後天とは、混沌、已に開け、形象已に剖れたる後のことであります。）そこで今帖首に題して、先づ、其の天を闢けば、混沌世界が剖れて、天をなし、地をなすもので、御坐りますからして、是から以後と云ふものは、天地開けて、萬物あると同じ道理で、山や嶽や、江や、海や、人や獸や、艸や木やなどの、千の有樣萬の形で、種々樣々のものが穰々と澤山に（穰々は、物の多く盛なる形）出來てき、簇々とあつまり引續きて、（簇々は集り續く形）やれ、山水畫とか、やれ人物畫とかやれ花鳥

と、かやれ書だとか樣々に、筆を下して書くものがありて、簇々として生じ、穰々として出來てくることは、必せりで、きつと請合である。(生也の也は、決語に非ず。論語に其の爲レ人也孝弟、亦也惑の類に同じく、上下の間に用ひて、襯をなすの辭なり。矣は、一定不移の意を帶たる決辭で、文法の書にも截然緊然之辭とあり。そこで必、矣、はきつと間違ないと云ふ意なり。)然らば、則、そうしてみるときは。(然則は上意を承け直に轉ずるの辭なり。俗語のさうしてみるとは、杯云ふに同じ)此の白紙混沌の世界を開き闢きて、(闢も開に同じくひらくことなり)天あり地あり、萬物あり。書あり書あらしむるの功をなしたものは、拙者に非ずして、誰何人ぞや。拙者を除ては、だれもあるまい。乃ち(乃は、文法の書に、上文を實にするの辭とあり。そこでなど、云ふほどの意なり)そこで笑て、筆を採り某生の請に應じまして、玆文に題しました。

さて、其の書帖に未だ、一人も、筆を下したものがない。白紙と云ふ所より、思附まして、天地未だ分れざるの、渾沌世界に見立て、題と跋とを天と地とに比し、自分が、第一に卷首に題するを以て、先天の意となし、是よりの後、樣々の書畫が出來るを、天あり地ありて後、萬物穰々簇々として生ずるに譬へ、其の筆初を自分がなすを以て開闢之功、非レ余而誰ぞやと結びましたので、中々に面白き趣向であります。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



童女教（其の二）

一　夫婦しまつなりとも女よし、内を守りて世帯を始末すべし。諺にも、洩柄杓にもたまる桶といふことあり。衣食器物ともに、ばんたむ、ものを費さず、たくはひ置て、不時の、求を待べし。但、かくいへばとて、一偏にひがみて、義理をも闕ば、人の出入もうとくなり、下々の養もとぼしく、かへつて家おさまらじ。爰に、費としまつとをいはゞ、つひゑをいふは用らるべきをもちゐず、用まじきことにものをつかふをいふ。しまつといふは、物のあつくすべきことを、まづつとめ、うとくすべきことをば、はぶくやうにして、はじめすへの調類を、始末と云へり、聖賢の金言にも、物本末あり、事終始ありと。平生しまつするは、公用私用、衣食ことかゝぬため、また、下々等に至迄、萬事はよく養ひ用べきそなへなり。夫は外を勤め、女は内をまもるものなれば、すべて、外事をばいらふべからず。夫をさしのきて、こざかしげに、男のわざにさし出するは、身にも應せぬわざと見へていとにくし。たゞ、内にして衣服をいとなみ、父母しうとにつかへ、朝はやくおきて、よろしく掃除をなし、たとひ、ものむつかしとも、毎朝はやく髪ゆひ外粧すべし。女の取亂したるは見にくし。むかし、東坡と云し人の詩にも、貧家なるともきよく地をはらい、貧女なるともたくみにかしらをけずれと作れり。

人の妻たるもの、内に節義を守るがゆへ、世に妻を内儀といふ富貴は一生の實、名は萬代のたからなれば、こゝろまよふて、不義の名は父母に及ぼすことなかれ。おもきがうへの小夜衣の歌を、心に忘ず吟詠してみづからいましめ慎べし。

一 人を召仕ふことは、手足をつかふごとくせよ。我思ふごとく仕はゞ、てあしも苦しまめ。ましてた人の身はさらなり。昔、陶淵明といふ人子の方へ奴を抱つかはすとて、是も人の子なり。我汝を思ふごとく、かれが親も不便とおもふべし。人の心は、いづれも同じ。常に念比につかふべしといひ送し、尤なることならずや。我をおもふて、人を思はぬ、人間のこゝろにあらず。畜類は、身のためばかりおもふて、他のうへをもはず。人と畜類のかはり、愛にあり。

一 女子は、三従といふことあり。いとけなきときは親にしたがひ、わかき時は夫にしたがひ、さては、子にしたがふものぞ。人と生れて婦人となることなかれと、古人もいふて、とにもかくにも、女は身もちのかたきものなり。つかふまつる親舅姑の、愚痴ならば、年の寄てふたゝび小兒に成給ふとおもふべし。皆いとけなき子の、無理なることをもいひて、泣うらむるをば誰もはらわしとも思はじ。萬物みなはじめに歸る理なり。いかなれば、老たる人の愚痴をにくむらん。何どぐちたりとも、小兒のこゝろよりは、とりよからむ。あつかふ世話も、子をそだつるよりは安かるべし。大かた、物の理を辨たる人も、年よりては、ぐちになるものなり。此愚痴を心よく思はずば、身にかへり見

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

老の後たしなむべし。

諸國孝義錄（河内國）

孝行者嘉七

嘉七は、交野郡打上村の百姓平三郎が弟なり。父は目しゐ、兄も物くるはしき病あれば、世のいとなみにたへかねて、村内のものにつかへ、奉公の暇に親の機嫌をとひ、雨風はげしく雷鳴る時は、深夜といへども、走りゆかざることなし。又、休日毎には、父を背おひて寺にゆきなどしけり。寳暦十一年八月に父はうせ兄の病も愈えにしかば、母嘉七にいへるは、父はなくなり給ひ、兄の病もいえたれば、別家にすめる伯母の許にゆきて、養子となれかし。さあらば心も安からんといふに、親のあふせそむきがたけれど、兄は子もあまた有て、りて、すぎはひもなやましく、もし、病ふたゝびおこる事もあらば、いかゞはせむ。母のいまさむほどは、たゞ、此のまゝにてあらむやといひしに、伯母も年おいたれば、外より養子して家つがせけり。はたして、兄の病ふたゝびおこり、世わたりもはかゞかしからねば、人につかへ居ながら、夜もいねず、草履草鞋をつくり、朝とく起きて山に入り、柴とりて兄のもとに贈り、さて、主人の家にかへりぬ。月夜には、兄の田畑を見めぐりなどして、力をそへければ、明和七年三月に、褒美として鳥目そこばくをあたへ、猶年々に米とらせけり。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

學のみちく(一)

故　網代弘訓　撰

學問に大綱三つあり。一つは神學なり。一つは事實之學問なり。一つは歌學なり。此の内にもまた、種々分派あり。下に、その大略を辨すへし。

神學

是者、日本紀、古事記の神代を講ずる學問なり。是にも、種々の分派あり。古代の講說者、釋日本紀にみえたり。又佛に混じて、釋する一流あり。兩部習合といふ。吉田家の神道是なり。

又、易に合して、釋する流あり。道春先生、出口氏、山崎氏等の流なり。又、儒佛によらず、皇國の古書によりて、釋する流あり。縣居翁、鈴屋翁の發明せられたる所にて、是を古學といふ。又、近頃、蘭說佛說をも、天狗小僧の妄言をもましへて、愚人を欺く魔說の神道あり。おそるべき邪說なり。かならず信用すべからず。

我國者、神國にて、國の政は、則ち、神の祭、神の祭は、則ち國の政にて、神道、王道分別なし。志かれば、我が國に、生れたる人は、神典をよみ、神を敬する事を、第一とする事勿論なり。志かれども、あまり神世に拘泥し、神代の事に穿鑿を加ふる時は、却て、神を玩び、神にけがすにわたる事あり。それゆゑ、昔より、神道者は、あるひは發狂し、あるひは子孫斷絕すといふ、一說もあるなり。おそるべき事なり。

○日本紀神代卷は、釋日本紀をよみて、古人の講說をうかゝひ、一條禪閤之纂疏より始めて、出口氏之講述鈔、谷氏之鹽土傳、谷川氏之通證篇之類をもよみて、諸家の說々之趣をもほゞわきまふべし。たゞ、古學之說のみを守りては、固陋になり

て、拘泥する所あり。

○古事記、神事巻は、古事記傳之説をよくみるべし。諸家之説之及所にあらず。千古之發明多し。

○古語拾遺は、齊部氏之句解龍氏之言餘抄等あり。群書類從に載せたる那佐氏之校本はかならずみるべきものなり。疑齋も一見ある書なり。鈴屋翁之疑齋辨にあはせてみるべし。

○延喜式八之巻之祝詞は、縣居翁之祝詞考、鈴屋翁之大祓詞、後釋、出雲國造神壽後釋あり。續日本紀之詔詞解もあはせみるべし。朝野群載にも、宣命祝詞之部あり。あはせ見るべきなり。

○神社之所在は、延喜式神名帳を本として、井家之神社考、白井氏之神社啓蒙、出口氏之神名帳考證等あり。古事記傳にも説あり。參考すべし。

○祭祀之儀式裝束器物等之事は、貞觀儀式、延喜式、西宮記、北山抄江次第、伊勢之書にては、延暦儀式帳等を本として考索すべし。

○伊勢之事を學ぶには、延暦儀式帳、延喜大神宮式より始めて、神宮雜事記、雜例集、其の外舊記數百部あり。是も、又一學問なり。

○服假觸穢禁忌之事は、喪葬令儀、制令假寧令、延喜式、等を本として、法曹至要抄拾芥抄、伊勢之書文保服假令、永正記等をかね學ぶべし。是も、また、一學問にて、學者之かならず知るべき事なり。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一種物合（二）

松竹堂主人 寄贈

九月廿三日於和學所執行

物判者　小中村清矩

歌判者　横山由清

二番

虫

左　歌勝　物持

すはまに、くさ〳〵のこまやかなるものをもり、くさの花茸など、ところ〳〵に生じて、野邊のおもむきをうつし、籠をおきたるは、宮人の虫えらびに出たるさまなり。歌は、籠の紐に、泥してかく。

鳴きかはしまつてふ虫のこゑ〳〵に
　大みや人もひかれ來にけり

右　物持

鬼の生ける子なりとて、親のあやしき衣ひきゝせて、いにけるを、ちよこ〳〵とあはれに鳴く。といふ枕のさうしの、みの虫のはかなことによりて、洲はまを、野べのさまにつくりて、ちいさきくだものをおきならべ、虫とおもはせ、うすものをおほひたり。うたは、金の泥して、露のおきたらむさまに、それにかく。

吹きすさふ秋かせさむくくるゝ野に
　ちゝよと虫のなくがあはれさ

物判云。建暦の御記にも見えて、千代の古道あと定かなる、嵯峨野の逍遙のさまを、うつされたるに、花より衣すりたちて、みや人のこころやりけむほどもれはえて、めさましき松の木のもとに、置れたる籠の中、ゆかしうおもはるゝなり。

右は、草子のはかなき筆すさひを、もとゝはしたれど、こゝろふかうとりなされたり、な。うちかけたる、うす物のすきまより、ほの見えたるは、さるむくつけきものゝ子、ともおほえねば、ちゝとなくらむ、あはれなる音も、立つべし。さてとりならべて、右左のむしの音をえらびなば、野へのさま見るが如くなるに、みやひ心ふかくおもひ入られし、籠の中もすてがたく、草むらの中に、秋風きゝしりけむ、みの虫のみのはかなげなる音も、身にしみて、秋の日ぐらしこの野にやたゆたひなむ。持

歌判云。秋の虫撰に、はるの子の日もおもひ出て、まつてふむしに、心よすらむ宮人の、袖ひかむとおもふを、ちゝよとなくなむ、みの虫の聲また耳つきに、おばゆれば、野べの中みちわけわづらひて、くりかへしつゝ、すしこゝろみるに、右の結句に、哀さとこゝとわりたるが、なか〳〵にあはれおくれてきこゆれは、又左の松虫の聲、しらべ高しと定め申す。

三番

薄

左　物勝

すはまに、土の色したる、くだ物を高くひくゝつみて、砂糖といふものを、まきかけて、薄うゑたるは、秋も末つかた、霜のおきたるさまなり。瓢もてつくれるうつはに、酒を入れて、入江のさまにつくりたるは、ほに出るといふゆかりの、あればなり。歌は、かのとしよりの朝臣の、堀河の院の御前にて、うつらなくまのゝ入江、とよまれけむ古事をおもひて、

行く秋のあかつき寒みまのゝ江の
をはながそでに霜まよふなり

と鳥のあとつけたらむやうに、すはまにかきつく。

右　歌詩

清原のおもとの筆すさびに、夜一夜ふりあかしたる雨の、今朝はやみて、あさ日のはなやかにさしたるに、前栽の菊のつゆ、こぼるばかりにぬれかゝりたる、すいかい、から門、すゝきなどの、うへにかいたるくものすの、こぼれのこりて、糸もたえさまに、雨のかゝりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。とあるおもふきによりて、苔地とおぼしく、緑の絹はりたる洲濱に、しの巻といへる物を、垣ねのさまにたてならべ、尾花ひともと二もとうゑて、糸もて蜘の糸かきたるさまをも見せたり。苔地には、殘りの露といへるものを、露のこぼれちりたるさまにおきて、歌は、その尾はなと露とを、歌書のさまにとりなして、すはまに、金の泥してかく。

日かげさす尾花がもとにちる露や
きのふの雨の名こりなるらむ

物判云。尾花なみよるといひけむ、名所の秋の夕くれのさまを、かいなてならず、物せられたる、洲はまの上の鳥のあと、つきなからずおぼゆるものから、ひさごの酒を、ほに出づるといふたかりに、とりなされたる、いさゝかしひたりとも、申すべけれど、それを入江のかたちに、思ひよせられたる、心きゝのほどをおもへば、しひてきずをもとむべきにあらず。たゞこの入江におりたちて、うつらなく夕くれのさびしさをも、わすれつべし。

右は、猶さかしきおもとの、筆つかひのえんなるに、おもひよられたる、そのおもかげを、ゆかしううつし出られて、みやびこのめる人の庭と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、まさしく見えたれど、ただすいかいのさまの、いにしへさまともおぼえぬがくちをし。左には、おとりぬべし。

歌判云。左俊頼の木工頭の故事をおもひて、むくの葉みがきたらむやうに、塵のきずなくよみ出られたる、眞野の入江の鳥のあとさへ、いとおもしろき心しらひ、いかにたけ高し。右は、清原のおもとの筆すさひによりて、朝日の曇なきしらべを、歌書にさへとりなされたる、艶に心ふかし。さてよきが上のよきを、とこゝろとゝめて見もてゆくに、秋の末野の尾花が袖よりも、雨の名ごりのうちはれて、日かげにちるらむ垣ほの露、光まされるこゝちして、右かつ。

主従心得草（承前）

諏訪忠元寄贈

日本惣風土記八十四四神地名錄にいはく、武州葛飾郡、下千葉村清瀧山正王寺は、眞言宗にして、開山は詳かならず。本尊は、阿彌陀佛、御朱印五石なれ共、由緒しれず。此の寺の境内に、大樹數多あつて、間近く、鴻の巣を所々にかけて、雛も見えたり。下枝には、雀かず〳〵止りて、雀の巣も多く見えたり、是を不思議に思ひ、鴻の巣の近所に雀の多きは、いかがの事と、住僧に尋ねしに、住僧のいはく、雀はよく、鴻の羽虫を取るゆえに、鴻はよろこびて、雀とは、中能なり。又鴻の巣へは、蟻のあつまる物にして、鴻の雛なんぎする故に、鴻より雀を頼みて、蟻のなんぎをふせぎ、又、雀の巣へは、蛇が子を取に來る故に、

雀は、鴻を頼みて、蛇のなんぎをふせぐなり。此の故に見かけのごとく、雀の巣あまたありて、互に頼み頼まれて、鴻と雀は、甚だ睦敷者也との事、僕初めて此の事を聞きしなり。鳥獣といへども、天性自然の能不能あり。形ある者は智あり愚あり。能不能も又各別にして、各々其の得たる所あり。鴻は形大なる者にして、小なるありを防ぐ事あたはずして、雀を頼みて是を防ぎ、雀は形小なる者故に、蛇を防ぐ事あたはず、鴻を頼みて是を防ぐ。能を以て不能を助けあふは、感ずべき事也とあり。人間もかくありたき物なれ共、兎角、我慢にして我身勝手を致し、人と不和となり怨敵のごとし。又、我がする事はよし、人のすることは悪敷と思ふがくせなり。大いなるあやまり也。わがする事にも、よき事あり、あしき事あり。又、人のする事にも、よき事あり、あしき事あり。

皆一得一失にして、人間の力に及びがたし。これによつて、能は不能を助け、不能は能を頼みて、災難を逃れ、一生安心にくらすべし。互ひに頼み頼まれて、いば相持にすべし。鳥類畜類でさへ、いば相持にして、互ひに安心にくらすに、況や、人としていば相持の心なきは、鳥にだもしかずといふべし。

○若き時のあやまりは、多くは色情にあり。是を急度慎むべし。一切のあやまりは是より起る。若き時に辛抱せざれば、老いて後大なんぎなり。若い時に辛抱すれば、出世も心安く出來るけれ共、年寄りては出世も出來ず、金銀ももふからぬとしるべし。する事なす事、皆左まへとなる。又、若い時心抱すれど、年寄るほど、段々仕合がよくなり、金銀も多くなつて、大福長者となる也。もし、若き時辛抱せず、どうらくすれば、老いて後

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

辛抱してかせく共、萬事間違ひ多くあつて、福徳は來らず、安心もなし。是によつて、若き時に辛抱してかせがねど、役に立ぬとしるべし。渡世肝要記にいはく、人は四十内に隨分と精出して金銀をもふくべし。四十過五十に成りては、氣根おとろへて、若き時とは大いに違ふ者也。若き時儲けて置かねば、役に立ちがたし。子供の澤山にある者は、よめ取、むこ取、我身の入用、一門縁者の愁ひ悦びに付けて、不慮の物入あるとなれば、兎角、若い内に立身出世をして、金銀を溜置ねば役に立たぬとあり。是に相違なし。又、若い内に辛抱して、少々宛なり共溜る人は、年寄るほど段々福徳の來る人也。



曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の四）

白松園主人

讀者は、之を讀んで、既に馬琴が、手腕の、決して、凡筆の摸し難きを感ぜるならん。斯くて時員は、遂に蜘手渦丸といふ强賊の爲めに殺されたり。朝稚は、稚けれども、機に乘じて、難なく家隷の仇を報じ、其の夜迷ひて、但ある山中に入りぬ。之、即ち、雁回山なり。是に於て、圖らずも、父の嫡妻白縫姫に逢ひぬ。

果して、一軒の山寨ありけり。かゝる深山には似げなく、由緒ある人の住居すと見えて、尋常なる家の建ざまにはあらず。少し引入れたる所に、脚門あり。この所は後門なるべし。折ふし、守人もなかりしかば、つと入りて見給へば、雌手のかたは苑とおぼしくて、黄櫨楓、いろ／＼に染なしたるが、松にまじりて、いと妙なり。結まはしたる生垣の木の間に、小鳥の囀づ

ろ聲、秋情を催し、つくづくと見入る、諸折戸の半開きて、裡には臈闌たる美婦と、六ツ七ツばかりなる男の童と、餘念もなく、木の子を拾ひてぞ居たりける。

而して白縫は、一旦父の捨てたる朝稚なれば、義を守りて、遂に名告ず、わざと强顔くて、かへしやりぬ。されど、朝稚は、暗に、其の白縫にして、父の隱家ならんことを察と雖も、名告ねば詮方なくて、思を殘して、方に立ち去らんとするとき、

もし父上の存命て、こゝへ來たまふ事もあらば、下野なる朝稚が、參りし旨傳へてたべ、遺憾やさばかりに……白縫は臂近なる、盒の内より、金の鞘一對をとり出し、こは主人が殊さらに、年來秘藏の物なれば、家苞に進らすべし。

下野までは道のほどもいと遙なれど、神の導きたまふ旅路には、恙なくて歸り着したまふらむ、且暮に、御身の無事を祈るにこそ、いふまでには侍られど、夕にははやく宿借り、天あけずば出でたまふな、名も知らぬ菌、鱗なき魚、人すゝむればとて、たうべ給ふな。奴婢が、草野へもて行くとて、飯盛りたる割籠こゝにあり、これを携へゆき給はゞ、一ケ日の飢ば凌がん、鞘を遺れたまふな、といひつゝ取りて手に遞與し、割籠を腰へ着けさして、緩みし帶を締添ふる、手首も力なく、信やかに勦りたて、路銀は乏しからずや、とこゝろ着くれば……

…………

優にして、自由自在なること、意至り、筆之に從はざるはなしといふべし。此の處の文章、尤もおもしろけれど、長けれどひき出づるによしなし。熟讀すれば、思はず人をして淚を催さしむるなり讀者必ずつきて見給へかし。

弓張月上篇は、爲朝の本國にありけるほどの事を記し、下篇は主として、琉球に至れるほどの事を記して、琉球歷史とも見るべし。中にも琉球王の妃中婦君といふ毒婦に對するに、夫人、廉夫人といへる貞操正しき、薄命の賢夫人を以てす。頗る上篇の彰江に似たり。されども、これは忠臣にして位高き、司馬順德の女にして、彰江の父忠重の比にあらず。司馬順德讒者の口にかゝりて、

遂に非命に死し、繼母は、廉夫人の妹眞鶴の幼かりしをかき抱きて遁れ、廉夫人も、父の罪によつて、宮中を追はれんとせしに、折から、王の胤を宿せしをもて、僅に之を免るやがて、生れしは、寧王女といふ王女なり。王女生れて十四歳に及び、立てゝ世繼となさんとせられしに、中婦君、及び、奸臣利勇といふ者に妨げられ、後遂にいよゝ禍に逢ひぬ。毛國鼎といふ忠臣王女を扶け、其の妻新垣、眞鶴等、猶多くの忠臣節婦姦臣惡女等をかき出し、錯綜せる事實を整然とかき連ね、終に爲朝によりて一丸となる。其の間人生の、如何に行路の難なるか、艱苦に耐ふる事の必要なるか、惡は暫し榮ゆといへども、つひには惡報必ず至るといふ意を寓して、讀者に感を與ふること最も深し。今、其の一部を說いて讀者の一粲に供せんとす。

琉球王、名は尙寧といふ、其の性惰弱にして、決斷なし。ひとゝせ海山頻りに荒れて、人民安き心もなく、之神の祟りによるといへり。其の時阿公といふ惡婆、中婦君と心を合せ、寧王女を失はんがために、尙寧王に申して、辰の年月日に生れたる女子を犧として、水の神に進らする時は、國中の厄難忽ちに治まらんといひて、暗に寧王女の年月に符合せしめ、その自ら出でゝ死に就かんことを挑めり。寧王女は、果して、之の由を聞きて、孝心深ければ、みづから出でて其の犧とならんとせり。

……かゝればわが身の生れたる年月は、阿公がいふところに符合す、翌はつとめて首里(國王の都なり)に參り、思ふ程を訴へて、この身を神に進らせなん、今宵かぎりの名殘なる、なからん後はともかくも、とり營ませ給へかし、といひかけて目を拭ひ給へば、廉夫人聞きもあへずうち驚き、こは思ひもかけぬ金の枝玉のわか葉、世をもしろし召さるべき、中城(東宮の意)のおん身にて、よしや國の爲なりとて、犧としならん、と宣ふ

とも、これを許し給はんや、かゝらん事は、戯れにしも宣ふな、さらぬだに佞人ばらが眼を睜り耳を側てつゝ、中婦君に告げんとて、隙を窺ひ侍るものを、いとすゞろなり、と諫むれば、寧王女がされて、いなさき〳〵の人のうへに、見隙しにも、女は心より外にあは〳〵しく、人におとしめらるゝ宿世ありなん、況て世を統べ、位を繼がば、よろづうしろめたくも、彼いたく思はるべし。憖ひ中城に遣されて、嫌忌の中に世を貪り、高き梢の風に折らるゝを忘れ侍らんは、わが志あらず、身を殺して仁をなし、國民を救ひなば、神も憐み人も嬉しみ、その應報空しからずして、王子誕生あらむには、こよなき國の洪福なり、もし王子誕生あらずとも、王孫にして臣下に連るもの、なきにしも侍らず、そのひとり二人をいはゞ、御身が亡父司馬順德、それが親族の毛國鼎なんど、みな天孫子の子孫ならずや、これらが子どもを養ひて、位を傳へ給ふとも、その源はひとつなり、他の國には子に傳へず、德ある人に讓れるを、聖の世とて後までも、いと〳〵譽ると聞ゐたり。親に先だち參るは、悲しきこといふべうも侍られど、病みて露なくなるならば、とゞめらるともいかにせん、何事も國の爲なりと思ひ諦め給へかし、わが身も思ひ絶ね侍り、といひ慰め給ふにぞ

云々

賢にして、悲壯、以て貴顯尊上の取るべき方針となすべし。嗚呼國に此の賢妃あり、家に、此の賢婦あらむ、何ぞ、その傾覆を憂へん。然れども、天の將に大任を斯人に下さんとするや。先づ、その心志を苦しめ、その筋骨を勞するなり。而して此の賢王女、賢夫人は、只に心志を苦しめ、筋骨を勞するばかりにはあらりざけり。酸亦酸痛亦痛、多く讀むに耐へず。王女の言に對して如何なる語をかなす、乞ふその次をよめ。

廉夫人は、誠ある、その言の葉を聞けば、なほ、胸まづいたくふさがりつ。宣ふところ理なれど、又この身にもなりて御覧ぜよ。……わが身も父の罪によりて、宮中を追はるべかりしに、王女胎内におはしまして、既に臨月なるをもて、その制度に及ばれず、只王妃に立てられん事を止められて、利氏を納れて中婦君とすこはみな利勇叔姪が所行なり、としれど

も女子の悲しさは、明白にはいふよしも、たねて汀の獨木船、ひさりうら見し國頭の、守郎の濱の小夜衙、味氣なき身を泣くばかり、獄樂には他人も聚り、艱難には親戚も離るさいとは、世の常言にいへるもうべなり。父順德討たれて後は、從弟なりける毛國鼎のみ、外にちからさなる者なく、針の筵に坐するが如く、懶き中にいく程なく、王女を産み奉りしが、王もやうやくに曉得給ひけん、順德を殺せしと、後悔の御氣色見にて、わが身を憐み給ふ辱けなさに、少しは憂を慰めつゝ、王女の成長し給ふを、まつがひありて世子さ、仰がれ給へば千代萬代、久後祝ふ十がへりの、花の苔を仇にして、民を救はんさ宣はする、おん仁心はさることながら、そは臣下のうへにこそあれ、國の爲めに、躬を愛するを、賢き君さまをすなり、よしなき事な宜ひそ、さ言語を盡してさゞむれば、熟聞き果てゝ歎息し、朝に生れて夕に死ぬる、蜉蝣さいふ出すら、命は惜むさきくものを、親の歎きもかへりみず、世々の讒の國を棄て、王位を棄てて只管に、死なんされがふにはあられど、かしこけれど父王は、讒者のまをすを實言さして、人を疑ひ給ふこさおほかり、さるによりて、此度機になるべき者を募め給ふに、その人を得給はずば、吾儕をこそ、さおぼさずさも、利勇等が申し不思議の仰あるべうも量がたし、そのさき固辭奉るさも、さはさて許し給はんや、よし又別にその人ありさも、罪なき者を殺さんは、この身に摘みていさ痛し、異國のいにしへは、老いたる親を野にも棄て、山にも棄てし例あり、さ聞くは實歟是は又、それにも劣らぬ神慮、人をもて犠に宛つる國俗こそ悲しけれ、夫れ來つて且くもさゞめがたきは、有爲轉變の理り、去りてふたゝび歸らざるは、冥土黄泉の別れなり、愛情哀慕の悲しみ、今にはじめぬことなれば、木の露、末の雫、先たつも後るゝも、別れはいづれおなじころ可し、聞きわき給へさいらへつゝ、立ちあがらんさし給ふ袖を、廉夫人引きさどめて、こは物にや狂ひ給ふ、君主の仰あらば是非に及ばず、みづから求めて牛馬に、身を比し給ふ事かは、さ迭に諫め諫められ、事果てしなき折しもあれ……

賢なりといへども婦人なり。之に處するに法を知らず、只一死して身を潔くするより、他に策の施すべきなしとせり。廉夫人はさすがに、之を得策ならずとすれども、之はた、救濟の法を知るに若

めり。まさに男子の力を籍らざるべからず。即ち、忠臣毛國鼎、此の危急存亡の秋にあたり、機に應じて出で來り、姦者の謀について、謀を行ひ、自家相撞着せしめて、容易く之を拉ぎ、王女をして泰山の安きにをらしめんとせり。（以下次號）

茶話それ〲草（承前）

木崎得玄述

孤峰庵碌仙齋川上不美

闢　葦雄出稿

古への紹鷗の世のおきてをも忘れ、道にそむける人に心を寄せ、萬にきよらを盡していみしとおもひ所せきさましたる人こそうたてしゝ心さまおもふところなくみゆれ。茶入よりこぼしにいたる迄あるにしたがひてもちゐるよ。美麗を求むる事なかれとぞ、古織殿の文にもみえ侍る。宗關公の茶事のおもむき書たまへる中にも、高官高貴のかたかたへ、御茶を參らするには、隨分輕き茶器をもてよしとこそ侍れ。

○手前いみじくも、取合このまざらんをのこは、いとさうぐ〲しくかざり立たる、會器に茶のなき心地こそすれ、露霜を愛して、所定めずまどひありき、月花にたよりある菴を求め、茶の湯は、えたり顔に住なせる、今時の人のこしらへものはうたてしまいて、世の人の譏をうくるをもれ。聞て口をしくおもひ、獨り閑にまとろむ樣なきこそをかしけれ。さりとて、ひたすらに、捨べきにあらず、こしらへものゝ風流も、年を經ぬれは、誠の道にいたれる事もあり、捨べきにもあらず。

○家の事、心に忘れず、茶乃道うとからぬ心にくし。

不美曰古織とは、利休居士の門人、古田織部正

侯の事なり。小堀遠江守政一侯の師なり。宗關とは、片桐石見守侯の事、則石川流の祖なり。

○不幸に、愁に沈める類人にもあらず、只十徳を着して、茶を點ずる人を見て、若き人、前後のわきまへもなく、うらやましくおもひ、頓て剃りこぼちては、後悔に間だなきものなり。有樂侯のいへる、數奇屋の釜客なくしてたのしみある事を覺ゆべし。

○我身の、やんことなからんにもまして、さびたるにも、釜といふものゝ、なへてありなんや。少庵織部遠州石州、皆、其の事を願ひ給へり。少庵のいへる、茶の湯のいたしかた、茶器は勿論、萬事分限よりは、輕くおこなうてよろし。年々諸事に美を盡しさえのおくれるは、おかしからずとや。相阿彌の傳へし文の中に、東山殿にありし、緋襴といへる茶碗を、同朋の人あやまちて、取落し三ツにわれたるを、御指圖ありて、爰をつけ、かしこをつげ、とありけるも、子孫へあらはれんとおもふなりと侍るとかや。

かへらぬくり言(下)

鹽井ふく子

妾がつきたるは六日目にて、八日目には葬式するものにはあらず九日目はともびきにて、日もあしとか、且つは、舊の正月十日にて、田舍の祝日、町内一同にて見送らんに都合もわるし。東京よりもつき玉ひぬれど、明日急に葬式行はれよと、人の云ふに、兄上は、今一日をとの玉ひしを、かやうの事は人言に從はんがよしとて、急みに諸所に飛脚を立つる等急がしく家は五六十人の人が浪うつ如くなりき。

やがて、夜もあけ、晝もすぎて、二時頃僧侶十人はかり來りて經をとなへぬ。御くわんのふたあけぬがよしと僧ども、云ひ、そのかげを拜みたりとてせんなし。たゞ、此のまゝに送り玉へとさとす人もありたれど、亡き御顔だもをがまゝほしく、如何にしても見まほしと云へば、兄も折角に用意してまちまうけたるもの、いで、我れ、見せんとて、かんの蓋をばとらせ、御つむりの方にたちより、空氣の入らぬやうにとて、つめたる石灰をかきのけられしが、如何に感じ玉ひてか、やみねやみね、見るはやみねとの玉ふ。妾は心もたしかなり、御顔のかはりたるは、かねて覺期せり、拜ませてとなはほとりはなれざりしを、人々にへだてられ、遂に亡き御影も見奉る能はざりき。僧はわまたして、いと高く經をとなへて、我がかこつ言を消すに似て憎く、へだてし人も憎く、兄も情けなく、己をつれこし人もにくゝ、さては、父の戒名に得壽とつけたるも憎くき心地して、腹立しかりしも、今思へば、心の狂ひなりしよ。

されど實に、御顔の拜めざりしぞ、我がうらみ、今もなほ口惜しく、日來は、我が身はなれぬ面影の、今は、たゞおぼろにて、如何なる御面ざしなりしともさだかに覺えず。兄君にはあり〳〵と夢にもおぼろき現にもうつりしと聞くものを。己は現には更に、夢に見るも、御顔はおぼろなり。中陰は魂魄の中空に迷ふなど聞けば、かしこけれど、今一度御姿をあらはし玉へとあけくれにぬかづき、有明の空にもながめ、たく香のけぶりにもうち守れど、遂にさだかなる御姿もうつらずして、中陰も今日かぎりとなりぬ。

　はての日に、

みすがたの煙りにもしは立ちやすと

迷ひにけりなあはれけふまで

今は、もはや御影のうつゝたのみもなしとて、甲斐なくいねしが、あかつきに目さめてかなしく、今日は何處の空にましますやと立ち出でゝ、ながむるまゝに、

ありあけの空にはかげの見えずやと
迷ひの雲はなほもはれじな

そもその折り、兄君の、妾に見せ玉はざりしは、御白鬚の血にまみれをりし故にて、まだ見ぬ血脈のあとより來りたるときは、鼻血を出すものなりと、よとぎせし僧の云ひをりしとか。あとにて聞きていよ／＼かなしさまさりぬ。

都には、なほひつぎをも送り、母上にも逢ひたる妹こそうらやましけれ。身重くだになくば、我もいかでかく都にながめをらんやと、姉君のひとり殘りて、かこたるゝもげにとこそおしはかられぬれ。

みまかられし二日三日前なりき。嫂に向ひ、我が祖先の姑は、正月六日、餅をやきをりしが、そのまゝうちふして、何のくるしみもなく、みまかられしと聞く。我もさやうに往生したしとの玉ひけるとか。實に死ぬるくるしみと云へど、父君はたん一つひきかゝるやうの事もなく、御足ものばしたまひし、また御手も兩傍にそろへさせ玉ひて、御顔もたゞすや／＼とねぶり玉ひし時に少しもかはらせ玉はず、くるしきものも、少しも見えず。實にうつくしき佛、如何なる大僧正とて、かゝる目出度往生はとげられまじと、見たる人毎に云ひはやし、おのれたちもあのやうの往生をこそせまはしけれなど云ひはやしぬ。

又、かねて、父君のおのれにの玉ひけるに、むかし大名の葬式は必ず、一週間とめおきしと云ふ。おのれもさやうにしてもらはんかなど仰せられし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か、はからずも一週間とゞめまゐらせ、御こしも檜の木のふしなし、今市には、曾つて見ざりしねがん、前世には如何なる上人にて、かやうにははて玉ふ。此の君天上はうたがひなしなど人は、たゞめでたがるも、我は、かなし。

日來は、我が祖父は、火葬をいとひて、尾久村に埋めよと仰せたり。己も死なば此のまゝ父のふん墓にと仰せられけるが、此の頃、兄なる人に、我もし死なば、屍をやきて、必ず福子の所に送り、父の墓にはうむりてよと仰せられしとか。かずならぬものを、子にかぞへ給ふ。返す〳〵も、勿體なし。む月の廿八日に出し給へる御文にも、妾が拙き筆して、のし送りたる松上の鶴の畫よろこばれ給ひて、たゞ汝が顏を見る心地しぬ。つとめよ〳〵と仰せこし給ひ、

世の中はうばらからたち女郎花
心してさけひめ百合の花

と一首の御歌と、外に、みづからりやうり給ひし小鳥のやきたると十六島海苔などそへて送らせ給ひぬ。品物の未だとゞかぬ程にかくなり給ふとはゆめ思はざりしよ。思へば、拙き畫も、今少しは送り、ねんごろに文にもとはましものを。あはれ、御慈愛の御心にまかせ給ふものならば、今一目御すがたをと、思ふにもかつて、妾をこなりと叱り給ひ、さやうのおろかなる子をおきては、死すとも往くべき處に行けずと仰せけるを、そはこよなきよろこび、往くべき所に行かで、我がほとりに迷ひ居られてよとたはぶれ言したる事もありたり。又父君の仰せをかしこまざりしとき、さやうに逆らひ、もし我死なば何と思ふぞと仰せられしを、何とも思はず、たゞ御壽命の來りたるなりと思ふと云ひし言の今なほ勿体なく覺ゆるを、必ず

泣くな、と仰せられし、愚痴なる心にありながらかやうに御かげの忘れたるやうなるは、妾がむかしの言の葉を覺えさせ給ひてにか、はた迷ひも居らせ給はぬは、人には靈魂ものこらぬものか、不孝の身は、とかくねざめあしく、くり言もかず侍るよ。

海山にうけしめぐみを亡き魂に

　ぬかづくのみの我が身なりけり

げに海山のふかき御めぐみを、亡きたまに謝し奉りしとて、何にかはせん。答へ玉はぬも道理なりな。

此の春はながめんものと思ひしに

　旅ねの床のまかせかねつゝ

と云ふ御歌反古のやうになりてありしを見つけ出でゝ、

もろともにながめんものとまちわびし

　我が世の春もまた絶えにけり

又

思ひきやしばしと云ひしその春を

　かへらぬ旅の門出なりとは

一生に必ず一度はとの玉ひをられける伊勢へも、遂に參詣し給はざりしよ。（をはり）

歸省日誌　（三）

吉野高松

九日、つとめて、產土の神の社ををろがみ、先祖の墓にまうでゝ、かへさに、友がりとひて、何くれとものがたりす。さて、里の小學校に至れど、校舍改まり、敎員はかはり、數多き生徒も、一人として知れるものもなし。たゞむかしのおもかげをのこしたるは、古ひたるアレイのみなり。

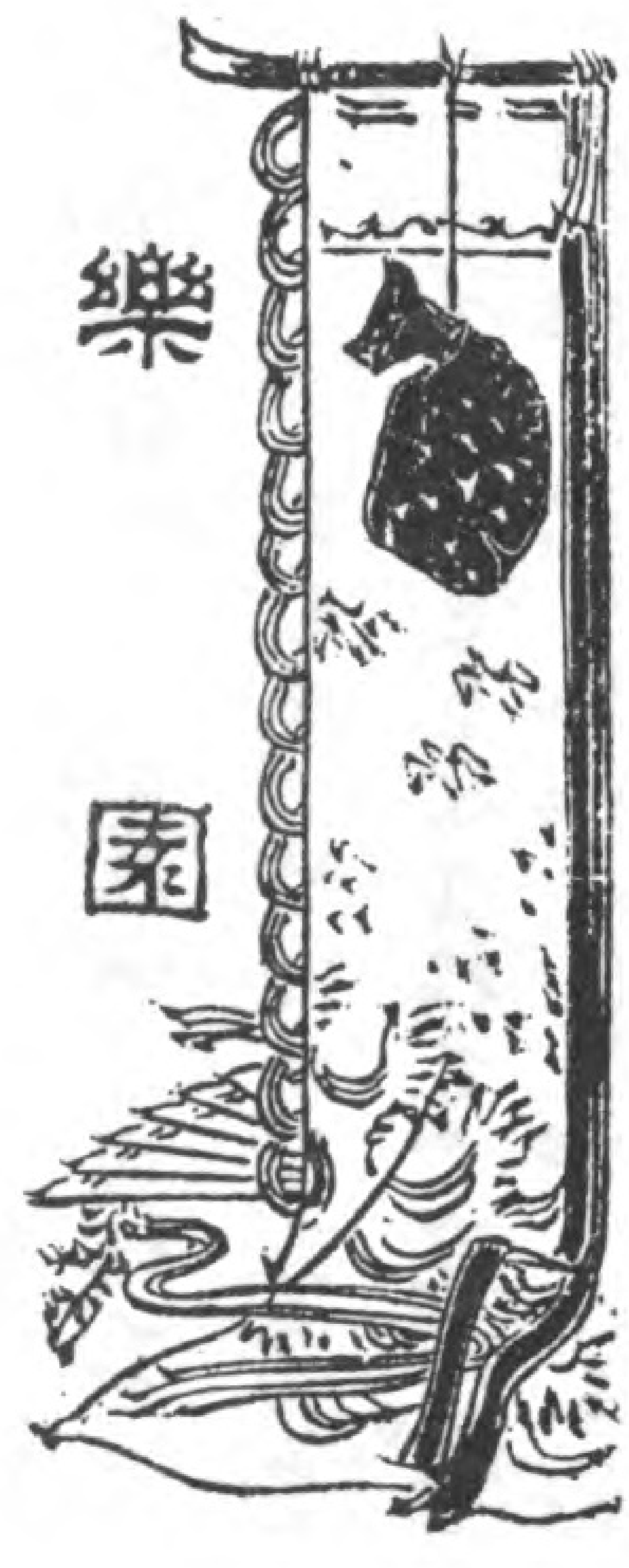
十日、十一日、十三日は、こもりゐて、父母の膝

下にて、ゆかしき日をおくりぬ。
十三日、とく起き出で、一の關なる壺響塾におもむく。こゝは少かりし時、漢文をまなびし所なり。師の君は、はやくうせ給ひぬと聞きしに、おくれ給へる刀自、まづ御靈床の前に導かせ給ふ。大なる御肖像の前にぬかつき、をろかむにも、いと、むかしのしのばれて、涙もせきあへずなん。先生はもと水戸の青山、藤田兩先生の門にあそばれ、この地方の爲にも、大き功をたて給ひ、はた、維新のをりにも、非常ぬ苦勞をせられし人なり。
十四日、師の君の奥津基所にまうづ。

　ありし世のむかしの思ひいてられて
　　たむくるはたゞなみたなりけり

十五日、父の君にともなはれて、五六里をへたてたる、某の地に至る徒足にて、行くに、父の君の健步、わかき身ながら、なか〳〵に及ぶべくもあらず。あくる十六日ふる雪を冒してかへりぬ。
十七日、都にかへるべき期日なれば、朝まだき親しくする人々のもとにいとまこひにゆく。さらぬだに、なみだがちなるはゝの君は、今日たゝずともとて、をしみ給ふに後がみひかゝる心地す。やがて夜の九時といふに、一の關より直行の滊車にうちのり、滊笛一聲をなごりとして、翌十八日まだ花の都に歸りつきぬ。





このごろ

いやよひも半なる頃、八重やまぶきの風にひるがへるは、井手のわたりも見る心地して、にぎはしければ、めかれせず、ながめがちなり。春の花の多かる中に、たゞ、山茶のみ、いと花にかはり盛ひさし。ことさら、つらをなしてうゑたる、つらつらつばき、つら〳〵に見れば、飽かず。階の下の薔薇も、夏を待ちがほなり。すべて、春は、草木の花、先立ちおくれて、いやをちにいとましく、おそくとく咲きつゝき、酴醾にいたりて、花のことをはりぬるは、なごり惜しと見ゆ。春の花は、いづれとなく、ひらけいづる色、ことに、目おどろかれぬるに、心みじかくてはやく散りぬるは、うらめし。九十の春光はいとながけれど、何くれとまぎらはしく、風雨も、また、しげゝれど、なすことなく果敢なくすぎて、とゞめあへぬ春のかぎりの、今日の日の夕暮にさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、春の名殘いと惜むべし。蘇子瞻が青雲還一夢といへる、また、うべなるかな。吾がともがら、うきよのちりも、わが心のきたなきも、花見るほどはわすれしに、今より後はいかゞせん。かゝる折にふれては、ことさら、時のはやくすぎて、失へやすきこと思ひしられぬ。老いぬれば、今いくとせか、花も相見むとおもへば、春のをしさは、いやまさりぬ。いとせめて、樽酒餘春を樂みて、この憂をわするべし。すべて、春のけしきは、一とせのうち、すぐれてえんなり。其

のうるはしきわりさま、言ひつくすへくもあらねば、かゝる拙き詞には、このかたはしだに、かたはらいたし。雨風に花はあとなくなりはてゝ、むなしき枝をのみかたみと見ぬれど、猶、春の色はそらに殘りて、おもかげさらぬも、なさけふかし。藤は、また、春にひとり立ちおくれ、夏にさきかゝりて、かたはらにならぶ花なければにや。ひとへに興あるさまに見えて、春にわかれし物思も、すこしわすらるゝ、心地ぞしはべる。

ねむげざまし

二世從吠譯

○聞くに忍びざるもの

奥山に住居求めたるに猿の啼くが聞えたる。秋のはじめころ、旅やどりにて聞きたる砧の音。少き婦人の夫におくれしなげき。老人の愛孫うしなひたる愁傷。母なき幼兒の夜なくこゑ。喪にこもり居るころ、ほのかに管絃の音を聞きたる。

このころ世の風俗いたく卑猥に趨りて、人々の、うちとけたる時の言語、談話のけがらはしく褻しきこと、これ、亦、聞くに忍びざるもの丶一なり。

○殺風景なるもの

花を見て涙をながせる。青苔なめらかに、また、いとうるはしき上に蓆をしきたる。垂楊を斫りはらひたる。月あかき夜、灯たつさへたる。山水を背にして樓を建てたる。花園につゞきたる菜園。花壇と一つ所に鷄鴨など飼ひたる。花見に茶を啜りたる。いづくも、是のみは、酒なくてはならぬものと見えたり。咲きほこりたる花の下に、湯文字とやらいふものを曝したる。

花咲しきより、日毎に雨のみ降りつゞきて、最いぶせかりつる

に、土曜の夕つかた、急に空晴れわたりぬ。翌日は陰りたれど、さすがに降るまじき天氣なりければ、花見といふものを見ばやと、向島にものしぬ。長堤十里、花、花につらなりて際限なく、人、人につゞきて所謂立錐の地だになし。女兒は綺麗なる衣服を見せむために、書生はかくし藝を吹聽せむがために、商にこれる人は廣告のために、或は、人を見むために、或は、酒のまむために、或は、朋友にさそはれて、或は、人のゆくにつられてそゞろに。ゆく水のながれ絶えざるが如く、また、よどみに浮ぶうたかたの如く、かつ來りかつ去り、其の花の下に逍遙するもの數萬人といふ數を知らず。されど、まことに花を見むとするもの、萬に一二だに得ること難かるべし。皆、これ、われとひとしく、花見を見に來りしにあらざれば、即ち、しか〳〵のために、よ。花は、むなしく爛熳なきそひながら、猶、不遇な觀ずらむあはれ、花のために涙なきあたはず。



まこと

まに生

心だにまことの道にかなひなば、祈らずとても、神々や守らせ玉ふらむぞと、菅原の神の詠ませ玉へる、まことに、誠の道をいひつくしたるまことの敎なりかし。心なき巖石にてだに、まことのためには動ぐとこそ聞け。情知らぬ荒夷も、まことのために涙をおとしゝ例すくなからず。まことなるかな。誠なるかな。信濃なる姨捨山の麓なる片田舍に、善五郎と呼べるものありき。老い母に仕ふること、忠實々々しからざりき。さすがに、惡人といふほどにもあらざりければ、世話するものありて、妻を迎ふることを得たり。妻、名を初といひて、こゝろざし優れてやさしく、夫に仕ふる道はもとより、母にかしづくこと、また、なみな

みならず。村の人は、善五郎の母は、如何なる果報にて愛でたき女を婦にはもちたりけむ。其につけても、善五郎の不孝こそ疎ましけれど、其の噂のみ流行けり。これを聞きたる善五郎は、いと快からぬことに思ひ、右樣の女を妻にもてばこそ村人にも嘲嗤まるれ。孝行ぶりして、夫に耻を與ふる不貞女とて、泣き詫ぶる女房を、遂に離縁してけり。はつは詮方なくて實家に歸りけるが、さてしも、日夜、たゞ夫と母との上のみ思ひ焦れて、明し暮しけり。善五郎は、おのが負へる名にも耻ちず、唯、酒のみありき、其の間暇には、博奕を事とし、母の事を顧みざるのみならず、たま／＼家に歸れば、惡口雜言を放ち、うち打擲さへしけり。然れば、村人は、皆いたく善五郎を惡み、惡五郎々々とあだなして、其の家のあたりをありくさへ忌々しがりぬ。



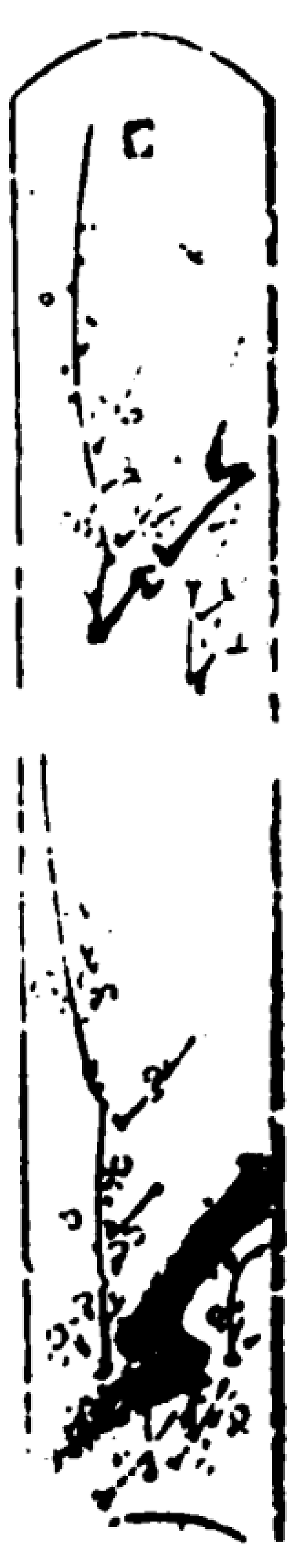
初も、一月二月ばかりは、帰らるゝこともやと、家にありてたゞ思ひくらしけるが、とても、其の望かなひがたしと見るより、日々、夫の留守をうかがひては、姑の許にゆき、何かの介抱のこる方方なく仕へ、好めるものある時には、もちゆきてすゝめけり。かくて、月を經、年を超ゆれども怠らず。

一日鯛のさしみといふものをすゝめ居たりしが、突然に善五郎皈り來れり。初は突とかくれければ、其は知らねど、母の前なる肴を見て、眼を瞋らし已に隱して贅澤三昧、斯様なもの買ふ錢あらば、我か博奕の資本に出せ。いざ錢出せ。錢出せ。出さずは斯うぞと、やがて蹴らむず勢に、初は、おもはず走り出で、なく／＼、わがもち來りしものなるとを語り、我故に姑様にれもはぬ難義を見せ申すと詫びくやみければ、之を聞きたる善五郎、

急に母の前に手をつかへ、これまでの不孝を謝し、また妻の方にむかひても、我か非道なりしことを悔い、我が來し方を顧みて、これまた、涙をおとして悔みけり。

即日、妻の實家にゆきて、詫びて初をつれかへり、これよりは、兩人して孝行を尽しければ、村の人にも思ひゆるされ、家も富みさかえて、夫婦一家むつましく、世をおくれりきとぞ。

初の眞誠、遂に、惡五郎をして眞の善五郎たらしめたり。まことなるかな、誠なるかな。





雨中山吹　東久世通禧
春さめに枝うちたわみやまふきの
ぬれたる色のなつかしきかな

殘花　久我建通
野にやまに殘れる花はすくなきを
なほみるひとの多くもあるかな

殘鶯　鍋島直大
のきちかき梅は青葉になりぬれと
猶うくひすのこゑそきこゆる

夕蛙　津輕承昭
山梨のはなちりうかふさわみつに
かはつ鳴たつゆふへさひしも

山家落花　竹屋光昭
あすよりは又も淋しくなりなまし
花ちりはつるやまのしたいほ

樵徑杜鵑花　水野忠敬
につゝじの花麗しくさきしより
明るくなりぬむかつをのみち

落花深　宮地嚴夫
昨日までくもにまかひし花ちりて
けふはかき根の雪とつもれる

溪山吹　小出粲
杉むらの木の間さやかにみゆる哉
きふねの谷のやまふきのはな

山杜鵑花　坂正臣
さくら花ちれはすなはち咲いてゝ
山をいろとるいはつゝしかな

苗代處々　遠山英一

家數はまはらなれともをちこちに
なは代みゆる小やま田のさと

雨後蛙　諏訪忠元

雨はれてゆふひてりそふ池水の
いはほかくれにかはつなくなり

柳間月　木村正辭

うちなひきかけのもりきて柳原
かすまぬ月もかすむよはかな

行路春雨　小榲榲邨

ゆくりなく雨は降來ぬ小みちして
花あるかたにかさやとりせむ

尋花　大畑弘國

青柳のかけ行くをとめ言とはむ
かすめる方に花やさきぬる

山吹繞池　近衛貞子

はることに八重山吹のさきめくり
池もちひさく見えわたるかな

古寺落花　蜂須賀随子

ちりまかふはなのにほひに古寺の
鐘のひゝきもうちかすみつゝ

田蛙　鍋島榮子

夕月のかけをふみつゝかへりゆく
たなかのかはつ聲しきるなり

岸頭山吹　前田朗子

垣根ゆく水のなかれも見えぬまて
さきをゝりたる山ふきのはな

山吹散　常盤井文子

山吹のはなちりそめしゆふくれは
かはつの聲もさひしかりけり

隣落花　大谷壽子

中かきのとなりの庭のさくらはな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

わかゝたにのみ散りて來に鳧

故郷山吹　佐藤艶子

人しれす折てやゆかんなつかしき
むかしのやとの山ふきのはな

風前落花　中島歌子

やなきにもさはらぬほとの春風に
絶すみたれてちるさくらかな

蛙　鶴久子

賤か屋の垣ねのなかれやまふきの
さくかけ見えてかはつ鳴なり

杜鵑花　宮地小東洋

水上にたかおりすてしたにかはの
なかれによとむにつゝしの花

海邊花　宮谷元子

島山の松の上にもしら雪の
かゝるや花のさかりなるらむ

松間花　大畑千代子

たちならぶ松の梢も埋もれて
五百重かさなる花のしらくも

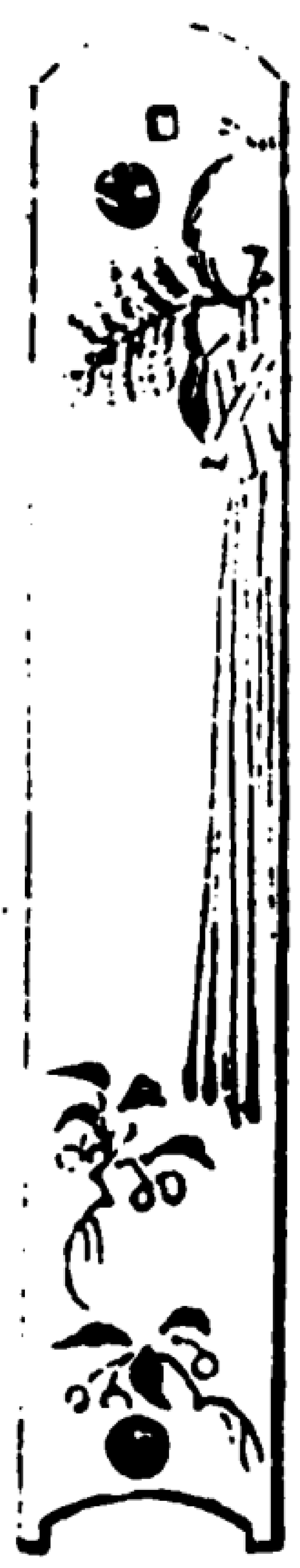
奈良にて　丸玉子

ふるさとゝなりにし奈良の草まくら
むかしをゆめにみる心ちして

門前燕　長歌并反歌　松浦辰男

打靡く、しだり柳の、下陰の、永き春日を、つばくらめ、西に東に、亂糸の、亂れあひつゝ、門の巣に、入來るみれば、門の巣を、出るをみれば、あはれ子を、思ふ故なり、子を思ふ、親の情は、鳥すらも、變らざるらん、子の爲に、餌をしあさると、朝夕に、心のみかは、翅まで、休めざりけり、あはれ此、親の情を、離つばめ、巣をたつ後

も、忘れさらなん、
のどやかにゆらく柳のしたかげを
　いとまなげにも飛ぶ燕かな



春人事　長歌并反歌

春霞、棚引野べに、振はへて、出し少女は、春の日の、くるゝも知らず、歸るさの、遠きも知らず、はる〲と、果なき野べに、果もなく、若菜つむなり、若菜つむ、少女の母は、門に出て、今か今かと、歸る子を、待らんものを、歸る子は、待らん親の、心さへ、忘れにけらし、若菜つむとて、

摘草かあるは花見か少女ども
　野中の道をむれて行く見ゆ



雜報

●觀櫻御宴　天皇皇后兩陛下には、豫て、仰出されし如く、御一列鹵簿御遊幸の略式にて、大徳寺侍從長、高倉典侍、各御陪乘申上げ、先月廿日午後三時三十分宮城御出門濱離宮に御幸あらせられ、觀櫻御宴御催ふしせさせ給ひたり。斯くて同五十五分、離宮御着輦あるや、御苑入口には、先着あらせられし有栖川宮殿下を始め奉り各親王方各大臣、同夫人、土方伯、大隈伯、板垣伯、近衛公爵等一同奉迎し、　兩陛下には、侍從の御先導にて、中島にわたらせられ、御茶屋にて暫時、御休憩遊ばされ給ひて間もなく、萩の御茶屋の方に向

はせ給ひしに、此の邊、御通御の際、右側には、各國公使同夫人、同館員、各國軍艦乘員、左側には、各皇族、大臣、親任官、大臣待遇者等、整列拜謁を賜はりたる上、之等諸員を從へさせ給ひ、新設の御立食所に入らせられ、更に、各國公使、各皇族殿下各大臣、親任官、大臣待遇者に謁を賜ひ、直に、御開宴　天皇陛下には、外國使臣等に仰せられけるは、　艶陽三月の好時節に際し、卿等と此の樂みを共にするを喜ぶ。

第三懸賞當選

賞品



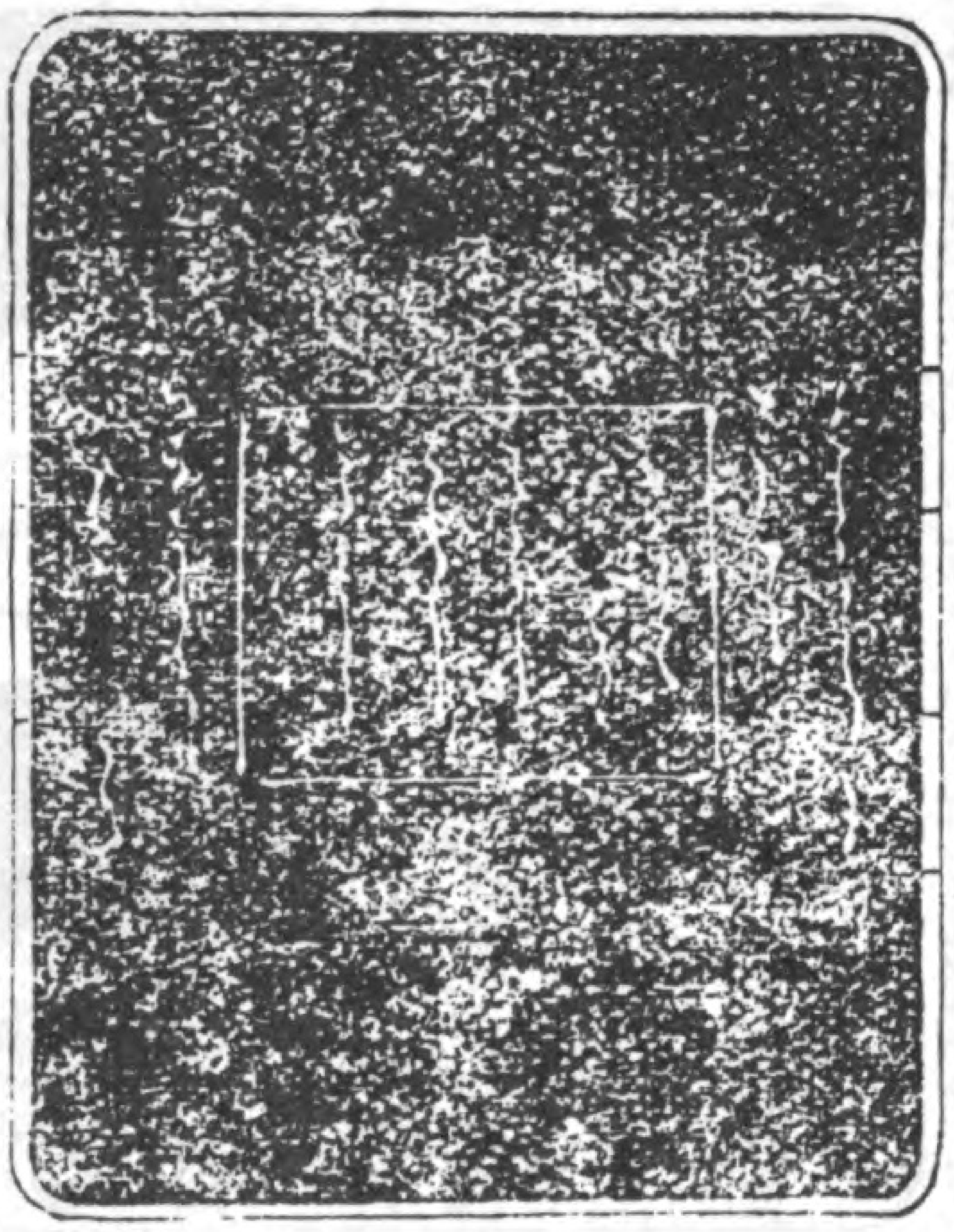
硯箱ノ蓋ノ表

内外群臣一同恭しく、天恩の優渥なるに感激し、思ひ／＼に、御苑の櫻を陪觀し、何れも、十二分の歡を盡し、兩陛下には、四時過る頃、還御仰出され、參會者一同は、何れ奉迎の際の如く、御苑の入口に奉送したりと承る。

●大元帥陛下御發輦　大元帥陛下には、兼ねて海軍大演習御親閲及び、觀艦式臨御の爲め、廿六日午前七時三十分御奉送の　皇后陛下と、御同列にて、宮城御出門せさせ給ひ、新橋停車場に、御着輦、御陪乘は、德大寺侍從長、供奉は田中宮內大臣、川口同次官、岡澤侍從武官長、外宮內書記官、侍從、侍醫、侍從武官、又た、　皇后陛下御、陪乘は、高倉典侍、供奉は、香川皇后宮大夫、山內皇后宮亮、田中式部官外、數名女官にて、陛下の停車場御着あるや、同場前に、整列奉送せる近衞步兵騎砲工輜の諸兵は、一齊に捧銃の最敬禮を

なし、陛下には、陸軍樂隊の君ヶ代、喇叭手の奉送の曲、吹奏の間に、便殿に入らせられ、同所にて、暫時御休憩中、先着の有栖川宮威仁親王、久邇宮邦彦王兩殿下を始め奉り、在京各大臣、川口宮内次官、板垣伯、大隈伯、其の他、親任官に謁を賜はり、松本長官の御先導にて、間もなく出御せさせ給ひ有栖川宮殿下を始め奉り、供奉の諸官と共に御乘車　皇后陛下には、久邇宮殿下以下、諸員と共にプラットホームにて、御奉送、

仝上



仝蓋ノ裏

親しく、御告別ありし後、同八時御發車遊ばされ給へり。當日同停車場迄、奉送せしは、各省各次官、陸海軍將校、各貴族院議員等數百名なりき。因に　皇后陛下には大元帥陛下御發車後、直に還御せさせ給へり。

●御慶事期日御發表　いにし廿七日左の通御發表せられたり。

宮内省告示第四號

來五月十日を以て、皇太子嘉仁親王殿下婚禮を行はせらる。

明治三十三年四月二十七日　宮内大臣　子爵田中光顯

●御婚禮告期使差遣　昨是告期使として、東宮大夫侯爵中山孝麿氏を、九條公爵邸へ差遣はされ、來る五月十日御婚禮を行はせらるべき令旨を傳宣せしめられ、公爵は次で參內して、御禮言上せり。

●皇室婚嫁令　朕茲ニ樞密顧問ニ諮詢シ、皇室

婚嫁令ヲ定メ、皇子孫ヲシテ、循行スル所アラシム。

御名御璽

明治三十三年四月十五日

宮内大臣　子爵田中光顕

皇室婚嫁令

第一章　大婚

第一條　大婚ノ禮ハ、天皇、滿十七年ニ達シタル後ニ於テ、之ヲ行フ。

第二條　天皇、皇后ヲ立ツルハ、皇族、又ハ、特ニ定ムル華族ノ女子、滿十五年以上ノ者ニ限ル。

第三條　大婚ノ約ヲ成ストキハ、之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告シ、奉幣使ヲ、神宮、神武天皇山陵、並、先帝先后ノ山陵ニ發遣ス。

第四條　大婚ノ約成リタルトキハ、宮内大臣、之ヲ公告ス。

第五條　大婚ノ禮ヲ行フ期日ハ、宮内大臣、之ヲ公告ス。

第六條　大婚ノ禮ヲ行フ當日、之ヲ賢所、皇靈殿神殿ニ奉告ス。

第七條　大婚ノ禮ハ、別ニ定メタル式ニ依リ、賢所大前ニ於テ、之ヲ行フ。

第八條　立后ノ詔書ハ、大婚ノ禮ヲ行フ當日、之ヲ公布ス。

第九條　大婚ノ禮訖リタルトキハ、天皇皇后ト共ニ、皇靈殿神殿ニ謁ス

第十條　大婚ノ禮訖リタルトキハ、天皇皇后ト共ニ、太后太皇后太后ニ謁ス。

第十一條　大婚ノ禮訖リタルトキハ、天皇、皇后ト共ニ、宮中ニ於テ饗宴ヲ賜フ。

第十二條　大婚ノ禮ヲ行ヒタルトキハ、天皇皇后ト、共ニ神宮神武天皇山陵、並、先帝先后ノ山陵ニ謁ス。

第十三條　立后ノ詔書公布セラレタルトキハ、圖書頭、其ノ事項ヲ皇統譜ニ登錄ス。

大婚ニ關スル記錄ハ、圖書寮ニ於テ、之ヲ尙藏ス。

第十四條　闇中ハ、大婚ノ禮ヲ行ハス。

第二章　皇族婚嫁

第十五條　皇族婚嫁ノ勅許ハ、其ノ約ヲ成ス前ニ於テ、之ヲ奏請スヘシ。

第十六條　皇太子、皇太孫、親王王結婚ノ禮ハ、別ニ定メタル式ニ依リ、賢所大前ニ於テ、之ヲ行フ。

第十七條　皇太子、皇太孫、親王、王結婚ノ禮訖リタルトキハ、妃ト共ニ、天皇皇后太皇太后、皇太后ニ朝見ス。

第十八條　皇太子皇太孫ノ結婚ニハ、第三條、第四條、第五條、第六條、第九條、第十一條、第十二條ノ規定ヲ準用ス。

第十九條　親王ノ結婚ニハ、第五條、第九條ノ規定王ノ結婚ニハ、第九條ノ規定ヲ準用ス。

第二十條　皇族ノ婚嫁ハ、其ノ當日宮内大臣、之ヲ公告ス。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第二十一條　皇族ノ婚嫁ハ、男子滿十七年、女子滿十五年ニ達スルニ非サレハ、之ヲ成スコトヲ得ス。

第二十二條　皇族ノ婚嫁ハ、直系親族、又ハ、三親等内ノ傍系血族ノ間、之ヲ成スコトヲ得ス。

第二十三條　皇族ノ婚嫁ハ、諒闇中、及、皇族、直系尊屬ノ喪中之ヲ成スコトヲ得ス。

第二十四條　皇族ノ婚嫁皇室典範、第三十九條、第四十條ニ違フトキハ無效トス。

第三十五條　皇族ノ離婚ハ、勅許ヲ經ルコトヲ要ス、之ニ違フトキハ無效トス。

第二十六條　皇族ノ婚嫁ニ關スル事項ハ、圖書頭、之ヲ皇統譜ニ登錄ス。

●四皇女御歸京　かねて、大磯に御成遊されし、常宮、周宮、富美宮、泰宮の四皇女殿下には、佐々木、林兩御養育主任、夫妻、其の他侍女、侍醫等を從へさせられある廿六日午後三時三十分、新橋着にて、御歸京あらせられたり。右に付き、田中宮内大臣を始め宮内官數名、大隈伯の諸氏は、同停車場に奉迎し、四殿下は、御馬車にて、高輪及び麻布兩御殿に御歸りあらせられたり。

●東宮御料車　東宮殿下御料車は、既に鐵道作業局にて、調製を終り、過日、中山東宮太夫、其の他東宮職の人々内檢を濟ませられたるに付き、數日前、畑汽車部長主任となりて、新橋國府津間に、試運轉を行ひたるに、重量の分配宜しきを得たる爲めに、通常列車に比すれば、動搖の度甚だ輕く、進行至つて穩なりし由、尙、近日、再び、試運轉を行ひ、御試用迄は、安全に御料車倉庫に奉藏し置く筈なりと承はりしが、右、御料車は、其の設計工費殆ど貳萬圓以上に及びしも、殿下の御思召もあり、其の筋よりも、可成質素堅牢に構造すべき旨御沙汰あり、且つ職員職工等も、此の工事を以て、無二の名譽として、勤勉したる結果、僅に五千圓にて、完全せりと云ふ。

●奉呈の勳章と韓國表勳院の由來　今回韓國王

より、我が　天皇陛下へ奉呈せらるゝ勳章は、同國勳章中、最高位のものにて、金尺大綬章と稱し、我大勳位菊花大綬章に相當するものなるが、元來同國表勳院は、今回新たに同國政府内に設けたるものにして、其由來は、一昨三十一年五月、勳章製造傳習留學生として、我が國へ送り來し同國人、正三品鄭東植、同金昌桓、無位鄭健謨、同金瑩摸の四人を、我が外務省の手を經て、神田區連雀町十八番地、勳章師相原幸吉氏に托して、傳習せしめたりしに、右四人は、其の後業を卒へ、相原氏より免許證明書を得て、歸國すると同時に、鄭東植は、新設の表勳院長に、金昌桓は、同院書記官に、其の他の二人は、奏任技師に任ぜられ、夫々の役員職工を備へて、機械を購入し、諸道具を調製し、始めて、勳章製造の業を起すに至り、從つて、今回我が皇室へ奉呈する名譽ある勳章も、是等の人々が、一生の譽れとして、丹精を凝らして、製造したるものなりと云ふ。因に記す。相原氏は、同表勳院新設の擧を賀し奉るの旨趣にて、美事なる銀製琺瑯燒香箱、一個を製造し、過般表勳院の新設と共に、其の院長に任ぜられたる、鄭東植氏を經て、之を韓國皇帝へ奉献したりとなり。

●孝女龜子　府下麻布飯倉三丁目廿五番地長岡龜子（五十一）と云へるものは、孝女の名かれも無かりしが、去月二十一日、飯倉小學校に於て旌表式行なはれたり。左に其の式の摸樣をかゝげん。先づ教育會幹事黑田清綱氏龜子の性行一班を演説し、次に、彰善會長高崎男爵並に、麻布教育會頭東久世伯爵より贈りたる頌德狀朗讀、次に有志者より寄せたる金圓を贈呈したるが、當日來會者は、府知事代理、坂本書記官横田香苗氏、麻布區長、同警察署長、其の外各學職員、區内小學校職員

生徒一千餘名にて、式嚴肅に執行せられぬ。左に頌德狀を掲げん

頌德狀

長岡かめ女

世にうるはしきものおほき中にも、人の心ばかりうるはしきものはあらじ、桃櫻、いろ〱の花はあれども、長岡かめ女が、繼母に事へて、一すぢに誠をつくせる心の花こそ、げにうるはしき限りなりけれ。つれに音曲の道を兒女にをしへて、よをわたる身なれども、つゆばかりも浮きたるおこなひなく數十年の久しき年月を一日の如く、よくつかへ、ちかきわたりの人々のほめたゝへぬものなきまでに孝養をつくされたるは、まことにたぐひまれなることにこそ。さればさきには東京府知事褒賞の典をおこなはれ、今また麻布教育旌表の式をあげらる洵にゆゑありといふべし。かゝるが故に、わが彰善會は、會則、第九條によりて、其の名を善行名譽録にかゞけ、且この狀を贈る。

明治卅三年四月廿一日

彰善會長正三位勳一等男爵　高崎正風

傳て曰く、善言を聞けば、則、之を拜すと云へり。況や、善行を以て傳ふべきもの豈唯之を拜して、休むべけんや。宜しく進んで、其の蹟を江湖に顯はし、更に龜鑑を後世に與ふるの道を講ずべきなり。我が、麻布教育會が孝女長岡龜子の篤行を美として、四方同感の士と共に、春光爛熳たる本日を以て同女を此場に招待して、其の旌表式を擧ぐる所以のもの、實に、此の理由に外ならざるなり。

女子が行狀の一斑は已に人の知る處なり。抑女子の至孝は、天性に出づる所なるが、身絲竹の遊業の家に出つるも、兌々冷酷の繼母に事へて、奉養怠らず、衷心覺悟する所ありて、敢て、夫を迎へざりしが如き、家計豐ならざるときに方て、倚從容として、婦道を過らざるが如き、母の枕席に侍して、其心を慰め、醫藥先づ自ら嘗めて、孜々倦むなく、而も遂に、其終を終るや、葬祭誠を竭したるが如き、身を愼み、行を修めて、未だ曾て、男子の入門を許さざりしが如き、其の孝、其の操、直ちに、是れ古の孝女節婦と、其の名を等ふするものにあらずや。宜哉、去歲十二月を以て、我東京府知事より、金幣を贈り、其の德行を賞揚せられたり。

近世彝倫の大綱漸く、弛ふ、先憂の士窃に、之を慨する、時に斯の如き孝女を、我鄉に出す、實に慶すべきなり。庶幾は、世間龜子の篤行を見聞する者、皆、其德風に感化し、篤行に進むを得ば、亦、以て、彝倫の大體に補ひある尠少ならざるのみにあらず、聊か、我か教育會の目的を達するに至るべし。依りて、協贊を得て、玆に旌の式を擧げ、賻金百二十圓を贈り、以つて、同慶の微意を表す。

麻布教育會頭　伯爵　東久世通禧

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

亀子の父を長岡己之吉、母を、お高と呼び同女は、嘉永二年四月を以て江戸に生れしが、生母、お高の虚弱にして、乳、不足なりしより、神奈川在へ里子につかはし、稍長して後、親の手許に引取りける、斯て、同女が、十一才の時、お高は、病死せしより、お辨と云ふを、後妻に貰ひ、己之吉は、杵家己之吉と名乗りて、長唄の師匠を爲し、品川、芝、京橋等諸所に轉じて、辛くも一家の生計と立て居たり。亀女は、天性至孝にして、繼母、お辨に事ふること、生母の如く、如何なる無理を言はるゝも、曾て、腹立たしき顔色さへ見せねば、近鄰、皆、其孝養を稱せざるはなかりき。然れども、世に云ふ、繼母根性のお辨は、斯くまでに、優しくもしほらしき、亀子を酷く扱ふ事、一方ならず。己之吉が、不在なる折などは、隨分あるまじき無理を言ひかけたる事ありしも、亀女は、只是命のまゝに、立働き居たるに、お辨にも、お芳と云へる、小兒生しかば、只さへあるに、お辨は、我が子のみ可愛がり、愈よ、亀女を虚遇するのみならず。本夫くらまして長岡の家督迄も、お芳に讓る事となりしが、此のお芳は不幸にも七歳の時病死せしかば、お辨は、一層自暴を起して、亀女を苦めしかば、遂には、見る者聞も人、皆同情の涙を注がざるは無りき。斯て同女も、年頃に成りたれ

第三懸賞當選の賞



文庫の蓋の表

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ど、他嫁せずや。また養子を入れずやなど、云ふ人多かれど、龜女は、少しも取合はず、到底、今の如き有樣にて、他人など入るゝ事もあらば却て、

仝上



仝裏

母上の御氣にかなはぬ事どもありてはとて、一生涯獨身にて出來る限り、兩親に孝養と、已が身の藝の稽古とに、身を委ねつ。遂に五十一歲の今日に至る迄、其志を立て貫し、未だ、曾て貞操をみだしゝ事なければ、稼業は浮きたる長唄の師匠なれ、汚はしき噂さなど、露ばかりも立ちたる事なしとぞ。扨又、父巳之吉は、去る明治二十二年中老後の病に果敢なくなりしかば、龜女は、父の遺業を繼ぎて、名も杵屋巳尾吉と改ため彌々家業をはげみ、傍、繼母の孝養に怠りなかりける。左れど繼母は取る年波ともに、益、我が儘のみ云ひ募り、五十に餘る龜女を小兒の如く追ひ使へ、或は、大聲にて、叱りつくる事あるも、飽まで、柔順を守りて仕へ居るうち、去三十年中、繼母お辨は、中風症に罹り、身体自由を失ひて、空しく病褥に在る事三年餘りに及びしが、龜女は、此の長の光陰を捲まず、撓まず、看護に手を盡しつゝ、一方には、矢張弟子の教授を勵み居たるが、昨年十一月十四日、お辨は、遂に、醫藥の効なくして、なき人とはなりぬ。龜女は、眞實の母の死せしにも優りて、歎き悲み、厚く葬送を營みたる上、七

日事ども殘りなく取濟しゝが、此の事何時か、人々の知る所となりかくはめでたき式をあげられたるなり。

●少年の龜鑑　神奈川縣足柄下郡小田原町字綠町四丁目、七百九番地、小島竹次郎の長男に、米吉(十才)と云ふ者あり。一家六人の世計にて、竹次郎は、日傭稼ぎ、母親お貞(三十才)は機を織り、日を夜に繼いで、兩親は、只業を勵むも、六人の口糊易きにあらず、言はゞ、其の日暮しの體なるを、米吉幼ながらも、家計の困難を見て、狹き胸を痛め、朝は夙に起き出で、學校に昇る前、何くれと家の手助けを爲し、學校より歸れば、草刈、又は、近所の人々の爲に使ひ歩きを爲し、夜に入りて、學科を復習するを常とせり。扨、又、日曜祭日の如きは、手近の山に分け入りて、山白竹を刈り來り、鮨屋、又は、小料理に持ち行きて、幾許かの金に換へ、斯て、得たる金錢は聊かも、浪費せず、其を二分して、一は家の補助と爲し、一部は貯蓄して、學校の授業料、其の他書籍筆紙墨の料に宛て居れり。賤が家の慣ひとして、家事に追ひ使はれて、學校は缺席勝ちに、且つ成蹟の譽らざるが多かるに、米吉は、去月の學年試驗に、平均九十點以上の成蹟にて、三學年中十四番の席を占め、將た、校長より左の賞狀賞品を授與ありたりといふ。

賞狀

神奈川縣平民竹次郎長男
尋常第三學年生　小島米吉
明治廿三年四月生

右は、資性溫良にして、學校に在りては、能く校規を確守し、夙に起き、夜に寢れて、父母の助力をなし、柴薪の類を採りて、之を販き、或は、他に雇はれて、賃金を得、一半を以て家計を助け、一半を以て、學資に充て、一意父母に孝順ならんことを務め、弟妹に對しても、能く愛撫を加ふる等、頗る感賞すべきものなり。依て、別紙目錄の物品を授與し、其の善行を表彰す。

明治三十三年三月廿六日
神奈川縣足柄下郡小田原小學校長
元泉久吉印

又、町長今非廣之助氏よりは、金若干、町の有志者山田克敬氏よりは、算盤、硯面等を贈りて、學事を奬勵したり。然るに、兩親は、家計困難の爲め、本日より、退校致させたしと申出たるも、折角熱心せる者を、廢學せしむるは、奬勵の道に非す。通學の暇だに差支へなくば、月謝、其の他の學校用の諸雜費をも、皆校費に支辨し得さする程に、就學せしむる方良からんと、父竹次郎に說き左らば再考致すべしとて、竹次郎は、引退きたりしが、兎もあれ、米吉の勉學、孝養再つながら感賞するに餘ありと云ふべし。

●孝子　福非縣足羽郡、下字坂村平民農、山下與三右衛門の長男與藏(十二才)稟性、純良、父、曾て、眼病に罹り、母は離縁となり、尋で、祖母、亦眼病に罹るや、幼少の身を以て、扶持承歡至らざるなく、傍ら、農業、及び石細工に從事し、僅に、賃錢を得て、時食の資に供する等、看護生計、之を一身に負ひ、鋭意勵精懈らず。其の志操數年を出でざるも、此の志行ある、未だ、其の比を見ざる所なりとて、福井縣知事は、若干の賞金を下賜す。

●苦學の生徒　福岡縣、浮羽郡、市杵高等小學校第二學年生、岩佐始と云へるは、一里餘隔りたる姫治村、字内ヶ原より通學せるが、家は頗ぶる貧困にて、父兄は學資を給與する餘力なきより、始は、學校より歸宅後、山に行きて、薪木を採り、开を、又一里餘も隔りたる、千足町に持行きて、賣拂ひ得たる代金にて、學校の授業料、及び、書籍器械を購ふの資に充て、餘りあれば、父兄の許に差出して、家計を助け居れり。斯る苦學をなしな

から、學校に於ける成蹟は、何時も人に勝れ、本年三月の定期試驗には優等を得て、卒業證書授與式の砌りは、多くの人より、口を揃へて、賞讃されたり。左れば、村役場にても、始の苦學力行に感じ、同人の鬻ぐ薪は、悉皆役場へ買上げ、又學校の授業料は、村長及び、助役にて負擔する事となりしが、其の評判は、益々高まりて、近日來始の薪木を所望する者、次第に多くなり、又組合長、國武壽吾は、白紙五帖を、村役場員よりは、筆十對を贈りて、其の善行を賞したりと云ふ。

●伊勢貞丈氏の祭典　去にし廿八日午後一時より、四條流庖丁師石井泰次郎氏祭主と爲り、日本橋倶樂部に於て、有職故實に通曉せし、伊勢貞丈氏の祭典を執行しぬ。同日は、餘興として翁の著書遺稿及諸家の秘藏する武器類を展覽し、鎧直垂等の着け樣、双五六盤の出し樣、庖丁刀式（神前鯉、水切鯛）琵琶の出し樣（平家琵琶の一節をも語る）足利時代の婚姻式等の催し有りて、散會せしは六時頃なりきといふ。

●巴里博覽會の盛況　佛國巴里萬國博覽會會開會以來非常の盛況にして、觀覽人員二十三萬に達し、我が日本の出品の如き、陳列未だ、半に過ぎざるも、頗る好評にして、賣約、甚だ多く、已に約束濟となりたるもの三十七點あり。東京下谷區池の端、玉寶堂出品の如きは、既に悉皆、約束濟となれり。又、閑院宮殿下には、御着以來、諸方よりの招待、絶間なく、爲めに、其の多くは、御謝絶あらせらるゝ由、去月十九日發にて、電報ありたりと。

●蠶桑だより

◎上總君津郡（二十七日附）早きは目下掃立に掛り遲きも五月四五日頃なるべく、掃立數は、一割乃至一割五分增、桑は發芽不良にて、一駄一圓五十錢位勞銀は、男二十錢より九十四錢、女十四

五錢。

◎伊勢松坂(廿五日附)　昨年生糸の好況に、本年は、飼養者多く三四割增の見込、蠶兒は、目下掃立中にて、桑は枝附、一貫目八九錢の賣買なるが、早繭は、來月二十日頃出廻るべしと。

◎陸前古川(二十六日附)　氣候の爲め、桑葉發芽惡けれども、養蠶家は、中々の氣込みにて、元西ヶ原傳習所長、練木某を聘する杯、頗る熱心にて、掃立は昨年より、五割增の見込。

◎岐阜(二十六日附)　本年、掃立量は、三四割增の見込みにて、目下掃立に從事せるが、早繭は、來月廿八九日頃出始めとなるべき、手都合なれども、蠶兒發生以來の降雨にて、桑の取入れに頗る困難を感じ居れり。

◎下總北相馬(廿七日附)　例年より、二週間遲れにて、五月三四日、頃掃立に至るべく、桑は、一駄一圓六七十錢位なりと。

●猫の化石　北海道、膽振國の深山に於て、アイヌが發見したる奇石あり。質に、小松石に類似し　形は、猫が首を擡げて、鳥蟲の飛ぶを獲んとするに似て、其の身長、體形、毫も猫兒と異る所なし。土人は數千年前、猫の餌を得んとして、睨みありし際、山火の土砂に埋沒され、其の儘化石したるものならんと稱し、珍重措かず。

●佛國婦人の生産力

(ハヴアートヴラザユエツト雜誌記者所說)

第十九世記の後半に於ける佛國工業界の機械使用の盛大に赴ける事は、同國婦人の勞働を吸收し、婦人は、自家の機織裁縫等の手仕事を捨て、各種の工場に入り、勞銀を儲くる事に汲々たるに至れり。佛國勞働局の報告に據れば、千八百六十四年に於て同國の各工場に於る勞働者の全數に對して婦人は二割一分なりしに、千八百七十三年には、三割三分となり、現今は尚增加して、三割八分强に當れり。即ち、現今勞働條例の下にある各種の工場に於ける婦人の總數は、八十五萬四百五十六人、男子の總數は、百六十五萬四百五十六人なり。此の外慈善的授産場の婦人約そ、十萬人餘を加ふ

れば、婦人勞働者の合計は、一百萬に上り、佛國全工場の勞働者總數の四割に達するなり。尚ほ、是等工場以外の勞働に從事する男女の計數も、亦、夥多なりと知らざるべからず。蓋し佛國の男子を千八百五十萬人として、內一千萬人は、其の生活費を儲け、其の中の四分の一は、工場に就業する者なり。又、男子と粗ぼ、其の總數を同うする女子に於ても、其の內自ら生活費を儲くる者は、四百萬人にして、其の中八分の三は、工場に在て勞銀を取る者なり。巴里は佛國總工業の三分に一を占むる地なり。今同所に於ける諸工業に從事する婦人の職業別、並に勞働者總數に對する定斯の割合を示せば、

職業名	一八四八	一八六四	一八七二	一八九一
建築	―	―	―	―
皮革	五	九	十一四分の三	三十七
金屬	五	三、半	七	二十九
家具	十	九	十一、半	三十八
食物	十二、半	二十	十五四分の三	四十三
楽器時計其他科學的		七	十八半	
單工製		十四	十五	
材木細工	十五	二十四	二十二四分の三	
貴金屬	十五	二十	三十八四分の三	
運送車馬具軍需品	十		卅四、半	
陶業化學的工業	二十五	二十三	二十四	四十一
製紙	三十三	二十五	四十六	四十七
巴里的製品	四十五	五十五	六十一	
衣裳	六十	六十五	六十七	七十六
織物	六十二	六十二半	六十七	六十二半

右表によれば、最後の三業に於いて、婦人は、男子を凌ぎ、其の他の業も、年所と共に增加する有樣にて、巴里に於る總製作業者中、婦人の數は、五割半に上るの概況なり。又以て、如何に佛國に於る婦人の生產力の巨大なるを知るに足らん。所謂巴里的製品以下の二品に至ては、男女の數及び、技術等、其の位置を轉倒し、外國貿易市場に於て、巴里手藝品の優美なる嗜好を歡迎せしむるは、擧

て婦人の力と云ふも不可なし。而して、將來、此等技術製品の需用の增加と共に、就業婦人の數は、益々加はるべく、目下精巧華麗なる手藝を要する扇子、玩弄品、製り花等の製造、最も盛にして、就中、製り花は、輸出品に重位を保てりと云ふ。

●賞品贈呈　本誌二百號に於いて募集せし、懸賞當選者に贈呈すべき賞品の中、秀逸の分は發刊即日、それ〲贈呈しをはりたるが、文庫硯箱は蒔繪せしむるため、時日を要し、去月廿五日にやうやく贈呈することを得たり。雜報中に挿入せる圖、即ち其の蓋の表裏面をうつせるものなり。鏡は、既に鑄上り、目下文字彫刻中なれば、是また、不日贈呈することを得べし。幸に之を諒せられよ。



女鑑歌文目次兼題

五月廿日　歌　新樹
　　　　　文　同返事
右五月八日〆切

六月五日　歌　霖雨の頃亡き人を思ひて
　　　　　文　孝女某の事を記す
右五月廿三日〆切

六月廿日　歌　樹間月
　　　　　文　旅行日記の一節（廿四字詰廿行以內）
右六月八日〆切

七月五日　歌　婦烈栗女の傳をよみて
　　　　　文　朝顏
右六月廿三日〆切

七月廿日　歌　山深瀧聲
　　　　　文　着鄕の期日をかねて知らする文
右七月八日〆切

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歌の庭



五月五日兼題　述懐

天　肥後國下益城郡松橋町　友永章子
すゝみ行く世におくれじとをしへ草
　こゝろのこまにかはぬ日はなし

地　越後長岡表三　小村璨子
する墨にいつかくほめるすゞり石の
　かたしといひていかでやみなむ

地　甲府市山田町　名取正代子
かれも人われもひとなり身のほどに
　たふるかぎりはつとめてを見む

人　肥後國八代郡八代町　田代綾子
ことしげき世にはあれども村きもの
　こゝろにちりはすゑじとぞおもふ

人　肥後熊本備口　尾多福子
わかこゝろみがゝざらめや世の人の
　かゝみとまではよしならずとも

人　伊豫松山萱町六丁目　田村きよ子
なにごともをのこの上にこえむとは
　おもはざれどもおくるべしやは

人　横山初音町山手　荻原濱子
つかの間もあたにはせしのわか心
　とゝせのさきにいでてなましかば

秀逸七首

身をてらすふみの光はうけながら
　なり〱くもろわがこゝろかな　大隅　山田稲子

世のつれさ思ひかへせはうきこさも
　みなたのしみさかはるなりけり　山口　田村多豆子

綾にしきなにれかひけんうつくしき
　さまはこゝろにありけるものを　長門　河野みち子

うきことの身に積るこそうれしけれ
　みなたのしみのたねさおもへは　長門　藤井りゑ子

たちぬひのそれはあれさも今の世は
　ふみかくみちもおくれさらなむ　山口　村上操子

難波江のあしのさはりのしげき世を
　いつまでかこつわが身なるらん　三重　河原芳子

なにごさも身のほごほごさ果しても
　つきせぬものはおもひなりけり　肥後　黒田明子

（以下原稿到着順）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おもふことまた片なりのしつか身の　父はいますはゝはおいましぬ　横山柳子

くれ竹のよにうきふしはしけくとも　なほきやひとのみさをなるらん　横山寸賀子

世の中につくすまことのますかゞみ　くもらぬこゝろみがきてしかな　佐々小琴子

しきしまのやまとこゝろを筑紫かた　つくしてしかなくにの御ために　佐々有鄰子

おいぬればなすべき事もさらになし　つきにはなにと身をなぐさめん　服部倫子

人しらぬ野べのかれ草さきにあひて　世にもにいづるをりもありなん　那須昂子

世の中にもてはやさるゝひとよりも　やまをたのしむ身こそやすけれ　中山庫子

月はなの世はしらくもの他におきて　ましらなく野にゆめやむすばん　村崎包子

世の中のせはしきうちにわすれぬは　きみとおやとにつくすまこゝろ　黒田美津子

何ごともすゝみすすみて行く世にも　おくれがちなる身こそつらけれ　松家清子

おもふことなす事ちぢのひとつたに　なることあらはうれしからまし　虎口貲子

おほかたはいたつら事もわれながら　しらですぎにしわれぞくやしき　下田鶴子

ながらへてうれしかりける大御代の　むかしに今日をおもひくらべて　濱口貞子

しら雲のうきてたゞよふさまみれは　八木沼里子

わか身のうへにかはらさりけり

あはれ身はうき世にありと知りながら　何にかひなくものおもふらん　内海順子

はることにさく花ならばすくしてし　わが身のさかりかへりくべきに　福原菫子

山のはにつれにたゞよふうきくもの　うきはこのよのすがたなるらん　石井豊子

進みゆくみよにならはておくれたる　わが身をわれといまぞせめぬる　高やす子

思ひやるかたもなきさのすてこぶれ　うきはならひとかれてしれとも　根田よし子

かひなくて月日をおくる身ながらも　すゝみゆく代はうれしかりけり　稲見きよ子

道といふみちのなかにもまことてふ　みちこそひとのまもりなるらめ　山下さよ子

こゝろをはたゝしくもちて清からぬ　うき世のちりにそまらざらまし　山方春子

こゝろにははらふとすれと任せぬは　うきみにそへるなみたなりけり　松田君子

くもるともみがけばひかる玉をもて　うきことつのるひとのはかなさ　仁保基子

かくはかりものそおもはじうきことを　かたらふとものある世なりせは　背本たま子

うき草の憂さのみまさるわか身かな　たゞうき世ぞとおもひつゝへむ　田中すゞ子

いつとてもたゆむまのなき時計こそ　ものまなぶ身のしなりなりけれ　影山やま子

心にはまかせぬ世とは知りながら
なほかこちつゝふるぞはかなき　岡田はろ子

つくづくとふみよむことに思ふかな
おのがまなびのわざのあさゝを　高石さ代子

人のよもかくあらまほしさくらはな
ちるをもおのがさかりにはして　高松照子

物ごとにうきくるしげき世のなかも
ゆめのうちにそなかは過ぎたり　森このゑ子

くれ竹のよのうきふしなきくごとに
こゝろむなしくなさむとぞ思ふ　服部范子

さし月はいろがごとくにすきゆけど
わがなすなりはすゝまざりけり　加藤數子

子なくして心やすげにひとはいへど
おいてはいかにさびしからまし　河合縫子

むかしよりならひと聞けど世の中は
さてもかくてもまゝならぬかな　名取よし子

いつまでも文のおくがなわけかれて
ふもとにまさふみないかにせん　永山登子

沖の石にうちよるなみのくだけても
きみのためにはみなばなしまし　井上津佐尾子

夢のまにつき日はかなくあけくれて
なすこともなく過ぎにけるかな　上原八重子

きのふまでさかりと見にしさくら花
けふはちりぬる世に社ありける　駒澤まつ子

思ふごとふみよむことのかなひなば
いかに此の世のたのしからなん　中村りう子

世のちりはかくて拂はんくれたけの
　竹村竹里子

君がためこゝろは千々にくだけとも
かけとすまさにふてまなひして　山田き代子

いたづらにすぎぬと許りなげかれて
かすにもあらぬ身をいかにせん　丸尾床子

あり難き世にあひながらいたづらに
おもひたへせぬ我が身なりけり　丸尾すがの子

ながれゆくとし涙とのみおもひけり
過ぎし我が身のかこたるゝかな　久野春子

天つ日のてらさぬとこはなきものを
わが身のうへにつもるつき日を　久野鍬子

にしききしむかしの夢ぞさめにける
なき世のひとのへだておくらむ　久野眞知子

うもれ木の顯ろましき身なれども
れやのむしろのさむきれさめに　中澤千野子

うみ山もおよばぬおやのみめぐみに
たゞにむなしく世をやへぬべき　大谷津峰子

さやかくと思ふばかりになにひとつ
いつの世かけてむくいまつらむ　永井さい子

はゝそはのよにしいまさば月はなの
なしもはたさてとしはすぎけり　宇高松子

うきことの數はいよいよそひゆきて
まさゐらいかにたのしからまし　土居繁代子

ことしげきうきよのちりに交るとも
おやなき身こそかなしかりけれ　本多とし子

我がこゝろわがおもふにも任せぬを
なさけかずへきこゝろはかりは　本多繁子
いかでかひとなたゞにたのまん

あはれ〳〵ことしも半すきにけり
いたつらにのみ日をくらしつゝ　吉田ひさ子

夏のきてわかはのしけるきのふけふ
かしらにゆきのつもる身そうき　石川樂子

なからへてうきこと多くつもる身は
むかしのそらそこひしかりける　石川類子

明らけき御代にあひなから何なれは
くもりかちにも日をおくりけん　石川南江子

つき花を見るにつけてもなか〳〵に
むかしをしのふたねとなりけり　石川久子

いかにせんいかにかすへき世の中を
そむけはかなしすめはすみうし　[illegible]みどり子

わか身にも若しきことゝ知りぬれは
もの思ふひとそあはれなりけろ　梯たけ子

なか〳〵にあるかひもなき埋木の
うもるゝ身こそこゝろやすけれ　松田春枝子

事しけきまなひのわさのひもなみに
すゝまぬわか身いかにしてまし　鎌田きよ子

敷しまのみちをわけてそさつくにの
ことのはくさはつむへかりける　日高かず子

玉くしけふたたびわかき身になりて
まなひのにはにあそはましかは　仁保しま子

日に月にすゝみゆく世に住みなから
いかてわれのみおくれかちなる　阪本榮子

時めきしむかしをまたもしのぶかな
かへらぬことゝかねてしれとも　財田富子

うき世そと捨てしれともさもすれは　田代隆子

いたつらに身は老いぬしかはあれと
かひなくかこつわかみなりけり　川上君子

古ことをしのべこかたるともなし
まなひのみちはまたわかくして　德永萬壽子

さそふべき水しなかればうもれ木の
いつかおもひをよにはもらさん　德永廣子

月はなをみるにつけてもおもふかな
そのまゝくちんよこそつらけれ　小森田輝子
あらしさくものさはりあるよな

五月五日女鑑兼題

試驗の成績を姉に報する文

地　三重縣度會郡宇治中切町　河原芳子

花の白雲、名殘なうきえうせたるこの頃、くれ行く春を惜しみ顔になきさはぐ蛙の聲も、おもしろうなりはべりぬるを、姉上には、いかにすぐさせたまふらむ。わらはは、いとすくやかにて、例のいたづきもうち忘れはべりし嬉しさ。まして、この春の試驗には、日ごろいそしみかひもあらはれて、何くれの課目も欠けし點なく、われながらめ

づらしきほどに侍りしは、やがて、姉上の、つねにみ心をそへたまへりしによりてこそと、いと喜ばしうなん。このこと、とくまをさまほしくおもへりしかど、くさ〴〵の事のしげさに、一日一日と後れはべりしは、いとつみふかきを、さる方にゆるしたまひて、み心安うおはしたまはらば、うれしき本意にてこそと、せいせきのひやううちそへまゐらするになん。あなかしこ。

人

下谷區徒町三丁目卅四番地　岡田柳子

吹く風も、のどかに覺え候をりから、今を盛りの庭の櫻を見るにつけても、めでにし君はと忍ばれてなん。父君母君には、常に變らず、すこやかにおはしませば、御心な、いため給ひそ。げに、こぞの春、その地へ、いで立ち給ひしより、雲井はるかに隔たりてゐ給ひながら、只管妾が學びの道の、進まん事を、御心にかけさせられ給ひて、度々いひおこせ給へる、嬉しとも嬉しうなん。さても、先つ日、御知らせせまゐらせし試驗は、やう〳〵、終へ侍りぬ。姉君の、日頃の御心づけに、愚なる身も、幸ひに、優等の數に入りて、貧きしるし文をさへ賜はりし喜ばしさは、いひしらずなん侍る。こは、師の君の、厚きみ惠によるとはいへ、常々、姉上の、御文もて、何くれと敎へみちびき給ひし、みかけならでやはと、深く、心に、感ぜられ侍り。こたびの試驗の摸樣、くはしくは、別紙成績表にて、見そなはせ給ひてよ。尙、來ん明年は、卒業の期となり侍れば、いよます〳〵つとめはげみて、深きみいつくしみに、むくいまゐらせんとこそ思ひかまうれ。御心安う思し給へや。あなかしこ。

(以下原稿到着順)

佐々有郁子

風の音つれもかき絶えはべりし罪なば御ゆるしたまひてよ。鳥が啼く東の都にまゐりて、學の窓に、雪をつみ、螢をあつめつる年月つもりて、今年の今月の今日の大試驗に、事なく及第し侍りぬ。やがて、錦を着て、故郷に歸り、櫻の花かげに、嬉しき秋なつられて、つもる海山の物談をつくし侍らん。出發の期日定まり侍らば、電信にて知らせ侍るべし。あなかしこ。

福原菫子

月日は流るゝがごとく、別れまつりてより、はや、一とせあまりさはなりぬ。姉君にはいかゞおらせ給ふらん。日頃は、學びのわざの事しげきまゝ、伺ひの文さへ打さだね、無禮の罪、よしなに許し玉ひてよ。さて、かれ〴〵、御心に懸けたまへりし、こたびの試驗、事なくはてゝ、成績もよき方に侍れば、御心安くおぼし給へかし、證書授與式はて侍りなば、一たび故郷へたちかへらん心

かまへにて侍れば、くはしきは、その折にこそ。先は、とりあへず、この事しらせまゐらせんとて、かくなむ。あなかしこ。

加藤さだ子

寒さも、やう〳〵薄らぎて、早うらゝかなる春景色、四方に滿ち候折から、姉上様には、益御機嫌うるはしう、學びの道にいそしませ給へる御事と、蔭ながら目出度存上まゐらせ候。こなたも、父上母君を始めまつり、皆々何の御障りもなう暮し居候まゝ、御心安う思召給り度候。扨、私事兼々、御配慮下され候、此度の大試驗に、恙なく、科を卒へあまつさへ、優等にて、賞品授與致され候まゝ、何卒御悦び被下度候。是と申すも、全く、師の君の御教育又、一には、父母君の御庭訓により候事に候。天晴身をたて名を上げて、師の君始めて父母の君の御恩の萬分の一に報いまゐらせんと、ふかく心に掛け居候。先は、うれしさのあまりこのこときこえ上げまゐらせ候かしこ。

大谷津峰子

百千鳥おちこちにさへづりて、野山の緑鮮に、すがの根のいと長き日よりと相成候。四月十八日の、御玉章今十九日、夕つ方着いたし候。先づ〳〵姉君には、御さわやかに渡らせられ、いと〳〵うれしう存じ上候。妾も事なう、日毎に、學の業に、いそしみ居候に付、御心安う思召し下され度候。いつも私への、御教訓、身にしみて辱じけなふ、くりかへし〳〵拜しまゐらせ候、兼れて御心にかけられ候、定期試業に、首尾よう及第いたし、あまつさへ、賞狀までいたゞき候に付、御安神下され度候、さるはいつぞや、妾の、あらぬ方にふみ迷ひて、學の道をないがしろに致し候ひし事をいましめ給ひし御言の葉を、身に引きしめて勉め候ひし甲斐のありてと、其の折の、御玉章見る毎に、涙の催されて、かの時、姉君のおはしまさずばなど、今更ながら、うれしう、辱なう、かげながら、ふしをがみ居候。申上たき事、澤に侍れど、拙き筆の、つくすべうも侍られば、之にて筆とめ候。かしこ。

宇高松子

其後は、打つゞき試驗中にて、心ならずも御ものの遠に打過ぎ侍れど、父上様始め姉上様には、時候の御障りもあらせられずや、御けしき伺ひまつるになん。次に、私事は、御陰様にていと健やかに、日頃御心つかひ給ひりし試驗も、首尾よく及第致し。今日成績表いたゞきたれば、此手紙と共に送り參らするを、御覧せさせ給ひてよ。扨て、試驗は國の學校の如く、何日と定め給ふことならで、學期の終方に至れば、不意に國語の試驗ありしがとおもへば、翌日、あるは二三日過て、他の學科を試み給ふといふ有様にて、其上程度も高く侍れば、なれぬ身には、殊の外困難におぼえ侍りしが、かくて誠の力もつき、かつはなつかしき父上姉君の御許をはなれて、はる〳〵都に上り、物學ぶかひもあるなれと存じ、怠らず勉強致し侍れど、愚なる身のとかくにおくれがちにて、いかでとおもひし此度の出來はゐも、御心をみたすに足らで、いと〳〵面なく申譯も侍られど、次の試の折には、かならず〳〵よき成績を御目にかけまゐらする樣、一きは勵めはげみ申すべければ、何卒〳〵父上様にもよろしく聞え上げ給ひてよ。先は、取りあへず、右御知らせのみ。あなかしこ。

村上操子

春風のいとのどけき頃になり侍りぬ。父うへ母うへには御かはりなくましますにや、うけ玉はりたくなむ。さてかれていつも〳〵、御ふみのはしに附そへ賜ひて、御心をわづらはしつる試驗も、昨日やう〳〵事をへ侍りぬ、學の業にはわきてつたなき身なれば、こたびはいかゞと念じをり侍りつれど、幸に及第優等のうちにかぞへられ侍りしは、いと〳〵うれしうなん。姉さまにも御心をや

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すゝめ賜ひてよ。かつは父うへにも母うへにも、こたびはいそぎ侍るまゝ、申上まゐらせず、其よしよきにきこえあげ給ひれかし、なにもまたのたよりになん、あなかしこ。

松田春枝子

待にまちにし卒業試驗も、今は滞りなく終りたれば、とく父君母上のみもとにかへらましと、ひたすらに、ふるさとのなつかしく、五六日のうちには、歸り路につかんと思ひ侍れば、くはしきことはそのゝちにこと、あらましなのみかいつけ侍らん。作文習字は九十點、數學は九十五點、他のものは百點にて、席順は、三十五人のうち五番にして、あまりよろしきかたには候はねど、及第のうちに入りたれば、修業のうちは、なにかとみこゝろをかけられし姉うへに、とく、こたびの成蹟をきこえあげんと、心のいそがるゝまゝ、かくなん。あなかしこ。

阪本榮子

まちわびし花はいつしかちりはてゝ、もろこしの花の王ともめでらるゝ、牡丹の花や、紫だちたる藤なみの、軒端の松に咲きかゝりたるなど、いと〳〵ゆかしう覺え候。今日此頃、姉君には、いかに詠めさせ玉ふらん。隙ゆく駒の足はやく、去年の秋別れ參らせてより、指折り數ふれば、早や、一とせの半と相成候事、實に夢の如き心地いたし候。かれて、御心にかけさせ給ひし妾の卒業試驗も、無事に相すみ候まゝ、御心安う思召被下度候。扨て、わが身の成蹟など、こと〳〵敷聞え上けんは、いさなこがましう候へ共、母君の切に仰するにまかせ、成蹟表御送り申候まゝ、御ひまの折に御覽被下度候。御承知の通り、かれ〳〵妾が不得手にて、姉君の數へを受候手筆術、このたびの試驗に、甲のしるしを得侍りしは、偏に姉君の御敎訓と、深く謝し上奉候。かしこ。

つれ〳〵なる夜嵐さへ
ふきすさみければ

春たつと、いふは名のみぞ、山里は昨日も今日も、さえかへり、かすむといひし、山寺の、かれも氷らん、はかりなり、ふけゆくよはに、まつ人の、音はなくして、まきの戸を、たゝくは風か、はた霰か、

今はとて思ひさだめたるまきのとを
またおどろかす小夜あらしかな

夜もすがらふゝきはいとゝふきあれて
れさめがちなる山のしたいほ

中澤ちの子



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三輪田眞佐子著

女子教育要言　全

●定價金三十錢
●郵税金四錢
●郵劵代用一割増
但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史曩に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきもの丶標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處するの方法を述べらる本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に重ぜらる丶かを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技倆を練らんかを述べらる蓋し世間女子教育の論尠からずと雖多く教育者の注意を促すを目的とするものなれは此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に説き諭されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懷く婦人と雖針をもてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目錄

東京京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家政

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四季料理の取合せ、（秋の部）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於內國勸業博覽會

賜有功賞牌

香油 八千代

香油 ゐつゝ油



香油八千代ゐつゝ油は最良の原料と最佳の香料とを以精製し品位の高尚優美なる香氣の馥郁として愛すべき無類の名油にして貴夫人令孃方束髪結髪孰れにも御用に適し髪の光澤を増しふけねばりを去りよごれ垢染みする事なくいつもさら〳〵として洗ひ髪の如なり衣襟等に染付く事少しもなく且頭熱を發散する効能有るを以て衛生上にも有益なる香油中の第一位の品に有之候煉油ゐつゝ香はゐつゝ油を原料とし普通の品と異り改良進歩したる油に付腐敗變臭の事なく毛髪に固着せず垢膩を去り衣襟に染付く事少なし芳香の如きは清涼の氣ありて快きを覺ゆゐつゝ油と御併用相成候はゞ其効彌よ深く其香り益々薫然たる事右に出る者無之候

右廣告仕候に付多少に拘はらず御用向の程伏て奉願上候也

東京市日本橋區田所町十番地

井筒屋香油店

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論

五版

●定價金貳拾錢
●郵稅金四錢
●郵券代用一割增

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざる也先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや七版忽ちに賣盡し八版は成るを告げたり世間の高評知るべきなり女史又本書を著述し女子處世の心得を說く温厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺く可らざる良書たり今や四版賣盡し五版成るに至る冀くは世の婦女達及父兄幷に女子教育に重大なる責務ある教育家諸士の一讀を望むや切なり、今左に其の目次の大略を掲げぬ猶詳細は本書に就きて見られよ

目次

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四版

紅塵庵俗禪譯

富岡永洗挿繪并に口繪　彩色優美口繪入

清風秀美　高優節雅

國の譽 獄の花

正價金五拾錢　郵税金八錢

總クロース　金文字入　全一册　菊版美本

神氣清潔なる一名士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に若悶するに當り高尚優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇内に發揚し最名譽ある儀表の下に最清廉なる結婚を爲すに畢る斬新奇警高尚なる小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が清淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

目次

▲▲▲▲試に本書所載の目次を掲ぐれば▼▼▼▼

●第一回英雄の逆境上●第二回英雄の逆境下●第三回慈父の遺訓●第四回孝子の出世●第五回遺訓を守りて孝子榮達を辭し月に對して秋夜に双親を思ふ●第六回熱心事に從て奇禍を細く●第七回活眼の處女賢者の寃を救はんとす●第八回司直の官不直の判決を爲す●第九回萬死の罪囚生を斷頭臺上に得●第十回天賜の使節善惡兩知人を招く●第十一回純良の君子獄吏の頑硬に苦む●第十二回情海の波瀾士女を漂蕩せしむ●第十三回情海波治りて夫婦の蜃氣樓を現はす●第十四回大願成就の山に登て失望の淵に陷る●第十五回萬難を排して少女獄中の良人の爲にす●第十六回少婦氣焔を吐き一方に惡人を挫き一方に英雄を泣かしむ●第十七回寃枉の囚人獄吏の暴横を憤り一打擊を加ふ●第十八回囚人再び死を期し獄吏再び望を失ふ●第十九回少婦至誠神人を感動せしむ●第廿回古今未曾有の三大奇觀……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

臨時 國光 發刊

本誌既刷の二萬冊は販布し盡し暫く江湖大方の愛顧に負けり今や增刷成る敢て諸賢の愛讀を辱うせむ事を切望す

人心の頽廢、風俗の淫靡底止する所なく邦家の將來に淘痛憂に堪へず冀は此の冊子をして惰眠社會に於ける半夜の警鐘たらしめむ。

◎世界に於ける日本の地位及其現勢◎日本教育の大本◎此の風俗の頽廢を奈何(以上は本社の勵聲疾呼して憂世慨時の士に質さむと欲する所のものなり)

(劍光)拜金主義と道德●矯世危言●憲政完美の要訣、●師弟の情誼と現行法律●古今教育主義の難點●獨逸海外政策に感あり●日本の國富と人民の負擔●農家の有志者に告ぐ、(以上同憂志士の寄稿にして沈痛剴切なる濟世の忠言也)

(瓊德)東久世伯勅語要義●蒼海先生偶話仁と智●忠本論●人世禍福の岐路●機言●養心論(以上何れも皆日本思想の本源に遡り君子國人の本領を發揮せむとを主旨とせるもの也)

(鏡影)德川齊昭(硯海)●孝明天皇御逸事●朝倉の大宮杜●太古史の研究につきて●琉球語研究資料、(以上何れも皆國史上の一新光彩)●和歌●詩●文、精を拔き粹を蒐め●八瀨の炭竈は日本武士の眞面目を描出せる小說なり●昔の塾舍と今の寄宿舍、此の他、畸人傳、名勝誌、佳話一束。

二月十一日紀元節(臨時發刊)に限り金參拾錢(紙數凡二百五十餘頁)本誌定價郵稅共一冊金拾錢

發行所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地 國光社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

涅歯(おはぐろ)に關する通信を望む

各府縣の市町村にがて往古より現今に遺留せる黒歯習慣に就て其事柄の珍しきさ否さに拘はらず少しも修飾する所なく知らるゝ限り知らし給へ●●●御婚儀の慶事に就て鐵漿初染の古式は此際御調査の上詳報ありたし(尤中等以上及以下の區別にて)▲▲通信諸氏の住所姓名は其都度御郎載を乞ふ他日聊其勞に酬はんさ欲すればなり

御鐵漿事御擧行の日　京都市蛸藥師通油小路東入　高山涅

御慶事紀念さして各府縣市町村にがて往古より現今に遺留せる(おはぐろ涅歯かね)習慣に就て其事柄の珍らしきさ否さに拘はらず少しも修飾する所なく知るゝ丈の通信を募集す◎通信諸氏の住所姓名其都度御記入を乞ふ他日聊紀念品を贈呈せんさ欲すればなり◎京都蛸藥師通油小路東入　高山涅

(おはぐろ涅歯かね)に關する通信を望む◎各府縣の町村に於て往古より現今に遺留する今習慣其事柄の珍らしきさ否さに拘はらず少しも修飾するなく知らるゝ限り知らし給へ　京都蛸藥師通油小路東入　高山涅

(おはぐろ涅歯かね)習慣に關係のありさあらゆる通信を募集す　京都市蛸藥師通油小路東入　高山青峰

至急廣告

本社發刊の『國光』『女鑑』御愛讀の諸君中御轉居の節は往々現住所のみ御通知相成候に付取調上甚だ困却且つ行違ひ遲延等の不都合を生し爲めに御迷惑相掛け候事も有之候間將來は**現**御住所**前**御住所とも詳細に御通知被下度此段廣告致置候

國光社雜誌部

國光、女鑑に關する御照會、御通知、御送金等は以後國光社雜誌部宛に御願申上候

社告　女鑑毎月五日、廿日、發行

定價		
一冊	拾錢	全國無遞送料
六冊(三ヶ月分)	五拾五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	

代金　通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込の事拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京南宮町郵便受取所、受取人は東京築地貳丁目廿一番地國光社宛、郵劵代用一割増

領收　別に領收證を出さず金員領收は上直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料又は端書封入の事

照會　編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」〇會計上に關する件は東京京橋區築地二丁目二十一番地國光社雜誌部宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納者の來書は一切受取らず

廣告料	
一行(五號活字廿三字詰)	金二拾五錢
半頁(一行三十詰)	金六圓
一頁(二段六十行)	金拾圓

料金は前納、位置は申込の順により組み込む

明治三十三年五月四日印刷
明治三十三年五月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地(電話番號新橋八八)　國光社

盃類製作廣告





◉金盃徑三寸

品位	自價	至價
純金	百八十五圓	貳百三十圓
廿二金	百七十圓	貳百五圓
二十金	百五十五圓	百八十圓
拾八金	百二十圓	百五十圓
拾四金	九十圓	百十圓
九金	五十八圓	七十圓
七金	四十八圓	五十五圓

◉同徑二寸八分

品位	自價	至價
純金	貳百八十五圓	參百四十五圓
廿二金	貳百六十圓	參百貳十圓

品位	自價	至價
二十金	二百六十圓	參百貳十圓
拾八金	二百圓	二百五十圓
拾四金	百四十五圓	百八十圓
九金	九十二圓	百十圓
七金	七十三圓	八十五圓

◉純銀盃

徑	甲價	乙價
二寸五分	五圓五十錢	五圓
三寸	七圓二十錢	六圓五十錢
三寸五分	九圓七十錢	八圓七十錢
三寸八分	十二圓四十錢	十二圓二十錢

◉同三組 最下層ノ徑中小之レニ準ス

徑	甲價	乙價
二寸五分	十五圓五十錢	十四圓五十錢
三寸	十六圓七十錢	十五圓廿錢
三寸五分	廿四圓八十錢	十八圓八十錢
三寸八分	二十六圓	廿三圓五十錢

以上何れも服紗及桐箱を添ふ

◉輕金盃

徑	甲價	乙價
三寸五分	壹圓七拾錢	壹圓貳拾錢
三寸八分	貳圓貳拾錢	壹圓七拾錢

◉同三組 最下層ノ徑中小之レニ準ス

徑	甲價	乙價
三寸五分	四圓八拾錢	四圓貳拾錢
三寸八分	六圓五拾錢	五圓五拾錢



妙技一等賞牌

時計及寶玉類
貴金屬美術品商

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
(電話番號新橋三百三十三)
(長距離電話番號新橋三百三十三大阪七百卅三)
(市外遞送料金貳拾錢)

天賞堂

天賞堂小川町出張所 東京市神田小川町(電話番號本局二六〇)
天賞堂横濱出張所 横濱市尾上町五丁目(電話八七六)
天賞堂大阪出張所 大阪市心齋橋北詰(電話東七三三)
天賞堂名古屋出張所 名古屋市玉屋町二丁目十七番戸
天賞堂廣島出張所 廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂熊本出張所 熊本市上鍛冶屋町十番地
天賞堂長崎出張所 長崎市今鍛冶屋町(電話番號二二九)
天賞堂福岡臨時出張所 福岡市橋口町榮屋方
天賞堂小樽臨時出張所 北海道小樽色内町越中屋方

(明治二十四年八月四日內務省許可)
(明治二十五年三月十二日遞信省認可)
(東京國光社印刷所)